2013 年度未来先導基金公募プログラム

2013 年度
「庄内セミナー」報告書

Contents

はじめに　3

「庄内セミナー」の概要 …… 5

参加者レポート…… 9

資料編…… 43

庄内セミナーの力――自然のまねびと学び

教養研究センター所長
不破有理（経済学部教授）

8月の下旬、今年も慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパスに社会人7名を含む参加者34名が集合し、庄内セミナーが始まりました。2008年に鶴岡セミナーとして出発したこの取り組みですが、昨年に引き続き、今年も生命を考える機会となりました。今回のテーマ「庄内に学ぶ生命――あらためて生と死を考える」は心に響くテーマであったようで、事前提出を求めた応募動機には、学生諸君が寄せる庄内セミナーへの期待が切実に看取できました。たとえば、生命や死という問題を考える機会がないので日常から離れてじっくり考えたいという思いを綴る学生や、東日本大震災を経た今、生と死について今一度考え直したいと記す学生、震災後、留学中に抱いた漠然とした疑問や日本人としてのアイデンティティを考えてみたい、あるいは留学をする前に日本の文化や歴史を知りたいと訴える学生が複数いたこと、また留学生の参加があったことも今回の特徴といえます。

セミナーは、学生が「生命」という文字を真っ白な紙の中心に書くことから始まります。「生命」を出発点に自由に発想するマインドマップは枝葉を広げ、自分と向き合い、仲間と語る機会となります。3泊4日のセミナーでは、場所を変え、周囲の環境を変え、学部・専門が異なる学生や社会人や教員と共に、年代も異なる初対面の人々と討議をし、寝食を共にする、このような体験は、日常の人間関係やもろもろの拘束から解き放たれ、本セミナーが掲げる目的のひとつである社交性の涵養にもなります。社交性とは人との付き合いのみならず、広辞苑の定義にあるように社会を形作ろうとする人間の特性でもあります。社会に出ていく前の学生の参加者が増えてきたのもこのような趣旨に反応した結果なのかもしれません。セミナーで聞いた講話の数々とさまざまな体験を経てどのような変容を遂げるのか、参加者自身も未知なる自分に出会うことになります。参加者同士、マインドマップを比較し話し合うことで、思いもかけない視点に気づき、自分の考え方を相対化することも学ぶことになるのです。

最終日の慶應義塾大学先端生命科学研究所の見学は本セミナーのまとめとして意義深いものとなりました。鶴岡という地から生まれた生命の営みが、スパイバーという発明を生み、QMONOS（蜘蛛の巣）という企業として、地域にそして世界に貢献できる企業に育ちつつありました。クモの糸のDNA解析から人工的にクモの糸を作り出すことに成功した世界的な発明です。その志はシンプルにして高邁、「世界に役に立つ」発見をすること。スパイバーは伸縮性と強靭さという相反する性質を併せ持つ夢の繊維。自然は相反する性質をいともたやすく共存させているのです。人は無から有を作ることはできません。自然の生命体の構造を徹底的に分析し自然をまねることによって、最先端の生命科学が実を結びました。真似る（まねる）と学ぶ（まなぶ）は同源であることにあらためて気づかされます。修験道が追求することとも通底しているのかもしれません。「修験道は自然との交流に始原を有する」のであり、修験道の基本は山岳信仰という日本人の心性の基幹に位置するものと固く結びついていることを山内先生の講義によって学びました。セミナーにおいて修験体験を経ることは、日本人の心性を羽黒の山を歩き自然と交感する中で内在化させることにもつながるのではないでしょうか。昨年の報告書で、山伏姿の学生が羽黒山参道を一列に歩く姿は産道を辿り命を得る様に

近いと記しましたが、今回、改めて、学生の修験体験の記を読み、学生自身が生命の再生を体感していることを確信しました。羽黒の山に死に装束である白装束を纏い入ることで死を通過し、滝の冷水に打たれ自然と一体化する中で、身体の内側から熱い生命の力が生じてくるのです。母胎で生命が結ばれ羊水に漂うがごとく、水の中で育まれていく瞬間を体験したのです。

庄内セミナーの参加者は庄内の地でじっくりと自己と向き合い、最終日に再度、マインドマップに向き合います。頭の中に散在していた思いや考えが結びつき、蜘蛛の巣の如く網目状に広がり、スパイバーの如く、しなやかに、かつ強固なネットワークと稀有な物質を形成することでしょう。学生それぞれが真っ白な紙に浮き上がらせた生命の網に、個々にとって有機的な意義を見出してくれることを願っています。

最後になりましたが、いつも温かく迎えてくださる庄内・鶴岡市のみなさま、鶴岡市にはマイクロバスのご手配、懇親会に「だだちゃ豆」アイスクリームの差し入れなど実に細やかな気配りをいただき深く御礼申し上げます。また講師をつとめてくださった方々、まず庄内藩の歴史を語ってくださり、学生の質問に笑顔で丁寧に答えてくださった酒井忠久氏（元庄内藩主酒井家 18 代当主・致道博物館館長)、即身仏の背景理解の助けとなるハンドアウトを準備くださり出羽三山信仰についてお話下さった春山進氏、致道館の教学であり福澤諭吉にも影響を与えた徂徠学を綿密な資料と共に熱くご講義くださった小室正紀先生（慶應義塾大学経済学部教授)、修験道と即身仏信仰から日本人の自然観について示唆に富む講義をしてくださった山内志朗先生（慶應義塾大学文学部教授）に御礼申し上げます。毎回、当意即妙な話術で学生の関心を引き付けてくださる注連寺住職の佐藤弘明氏、致道館見学の折に徂徠学と素読のご指南をくださった富樫恒文氏、そして学生の貴重な映像記録担当のみならず庄内の地理を掌握する舵取り役慶應義塾出版会の小磯勝人氏、セミナー出発前から報告書まで全体のロジスティックスを支えてくださる教養研究センターの日水邦昭氏、笑顔でサポートしてくださった新人スタッフ提橋季実子さん。そして質疑応答で盛り上げてくださった塩澤修平先生（慶應義塾大学経済学部教授)、学生の統括と面白トークで盛り上げる高橋幸吉さん（商学部准教授)、いつも穏やかな笑顔でさりげなく女子学生の支えとなる井本由紀さん（理工学部専任講師)、教員スタッフのみなさまにあらためて心より御礼申し上げます。多忙な中、プロジェクトリーダーとして、なによりも学生のために素晴らしいプログラムをまとめてくださった羽田功氏にあらためて敬意を表したいと思います。未来先導基金からの助成を得て実施されましたことを謝意を込めて報告申し上げます。

2013 年度「庄内セミナー」報告書

「庄内セミナー」の概要

第４回庄内セミナーについて

羽田　功（プロジェクトリーダー／経済学部教授）

1. 趣旨・目的

教養研究センターが主催する今年度の庄内セミナーは2013年度慶應義塾未来先導基金公募プログラムとして実施されました。「庄内セミナー」としては４回目の実施です（2008 年度には下記と同様の趣旨・目的で「鶴岡セミナー」を開催しています）。

山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点とするこのセミナーの目的は「教養力」すなわち「自立・自律力」と「社交力」の涵養を通した「教養」の基礎体力作りにあります。今回は、過去の実績を踏まえ、かつ内容・形式の見直しを行った上で、以下のような趣旨・目的を掲げました。

① 鶴岡市、TTCK を拠点として新たな体験・体感型の「学びの場」を創出する。
② 鳥海山･出羽三山、庄内平野、日本海に囲まれ、歴史･文化･自然･人の織りなす多彩な「生命」に恵まれた庄内をフィールドとして多角的に「生命」について体験・体感する。
③ 学生・大学院生・社会人の参加を募り、それぞれの参加者が忙しない日常から離れて、じっくりと「生命」について考え、地元との交流なども図りつつ、対話と議論を通してコミュニケーション力を高め合う。

2. テーマ

今年度のテーマは、「庄内に学ぶ生命―あらためて生と死を考える」としました。

2011 年３月 11 日の東日本大震災・福島原発事故による惨禍はいまなお多くの地域・多くの人々に深い傷を残したまま、思うような復旧・復興の将来像が描けない状態にあります。しかし、他方ではこの天災・事故が、多くの日本人が足元に潜在する死の影に目を向け、あらためて自らの生について、また死について考え直すきっかけとなりました。

庄内セミナーではこれまでも「生命」に焦点を当てたさまざまなプログラムを展開してきました。その実績を踏まえつつ、昨年度は「いま敢えて生と死を考える」をテーマの副題としました。「敢えて」という言葉には、3.11 の震災や事故を見据えつつ、それを越えてより深く「生命」に向き合おうという意味を込めたつもりです。

そして、今年度は第３回セミナーの体験を振り返ることで、再度「生命」について考える場を設けることとしました。つまり、少し違った視座からのプログラムを加えることで、あらためて「生命」について、私たちの「死生観」について考えてみようと思ったわけです。具体的には、庄内藩校・致道館とそこで講じられた儒学である徂徠学、徂徠学に基づく論語教育の一端に触れること、そして明治維新後の庄内藩の殖産興業の土台として元藩士たちによって拓かれた松ヶ岡開墾場の見学を通して、とりわけ幕末・維新期という危機的な時代を生き抜いた庄内藩士たちの足跡から、彼らの生命観（死生観）を読み解くプログラムです。

3. セミナーの概要

セミナーは TTCK を中心に８月 30 日～９月２日までの３泊４日で開催しました。このセミナーには学部学生 25 名、大学院生２名、社会人７名、スタッフ９名の計 43 名が参加しました。

初日は TTCK で６班に分かれて「生命」をキーワードに、思考･発想法の一つである「マインドマップ」を作成しました。その後、宿舎に移って、小室正紀先生（経済学部教授）による「徂徠学」をテーマとした講義と対話と議論を行いました。

２日目午前は注連寺で即身仏拝観、佐藤弘明住職の解説を受けて議論と対話を行いました。その後、松ヶ岡開墾場に移

対話と議論

庄内論語の素読体験

2013 年度庄内セミナー・プログラム

〈事前準備〉		
7 月 30 日	参加者に対する事前説明会	日吉
8 月 25 日	事前課題（「自分」について 600 字程度のレポート）提出日	
〈合宿セミナー〉		
8 月 30 日	［セッション 1］アイスブレイク・マインドマップ（1）作成・グループ討議	TTCK
	［セッション 2］「徂徠学」 講師：小室正紀氏（慶應大学経済学部教授）	休暇村 羽黒
9 月 1 日	［セッション 3］フィールドアクティヴィティ 1　即身仏拝観	注連寺
	［セッション 4］フィールドアクティヴィティ 2　松ヶ岡開墾場見学	松ヶ岡開墾場
	［セッション 5］フィールドアクティヴィティ 3 「庄内論語素読体験」 指導：富樫恒文氏（庄内藩校致道館統括文化財保護指導員） 鶴岡を知る（自由行動）	致道館・鶴岡市内
	［セッション 6］「即身仏と羽黒修験」 講師：山内志朗氏（慶應大学文学部教授）	休暇村 羽黒
	［セッション 7］フィールドアクティヴィティ 4 「八朔祭」見学	羽黒山
9 月 2 日	［セッション 8］フィールドアクティヴィティ 5　山伏修験体験 先達：渡邉吉兆氏	いでは文化記念会館など
	［セッション 9］「庄内文化論」 講師：酒井忠久氏（致道博物館館長） 講師：春山　進氏（庄内民俗学会幹事）	休暇村 羽黒
9 月 3 日	［セッション 10］慶應義塾大学先端生命科学研究所ラボ見学	先端研ラボ
	［セッション 11］まとめ：マインドマップ（2）作成とグループ討議	
〈まとめ〉		
9 月 30 日	事後課題（「生命」について 2000 字程度のレポート）提出日	
〈関連企画〉		
11 月 5 ～ 17 日	「慶應義塾と庄内」（セミナー写真展など）	日吉図書館
	庄内フェア（庄内関連書籍・物産・庄内ランチ販売）	慶應大学生協（日吉）

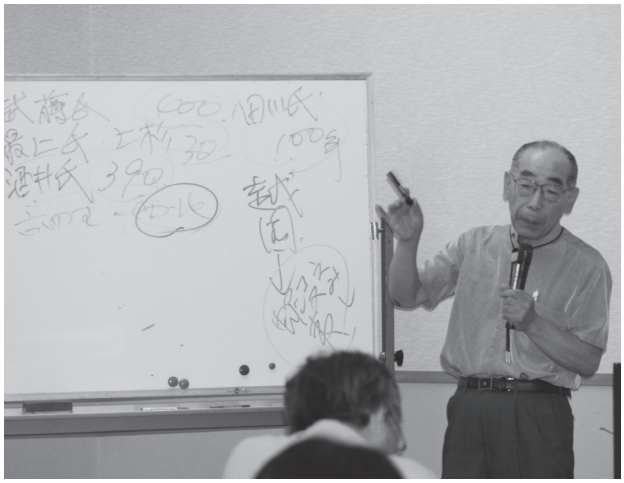
山伏修験体験

り、松ヶ岡本陣での昼食をはさんで松ヶ岡開墾記念館などを見学。午後は鶴岡市内に戻り、藩校･致道館で富樫恒文氏（庄内藩校致道館統括文化財保護指導員）庄内論語の素読を体験、致道博物館や藤沢周平記念館なども見学しました。夜は山内志朗先生（文学部教授）による「羽黒修験と即身仏」をテーマとした講義と対話と議論を行いました。さらに深夜には羽黒山山頂で行われた八朔祭を見学しました。八朔祭は秋峰入中の山伏たちによる稲穂の生育を祈願する壮大な火祭りで夜空を焦がす火にひたすら圧倒されました。

3日目は羽黒山を中心に山伏修験体験を行いました。白装束に着替え、山伏修行体験塾の渡辺吉兆氏の講話を聞いた後、滝行、床固め（座禅）、南蛮いぶし、火渡りで「擬死再生」の一端に触れる体験をしました。その夜は、酒井忠久氏（元庄内藩主酒井家18代当主・致道博物館館長）と春山進氏（庄内民俗学会幹事）による「庄内文化論」。庄内武士の死生観や庄内における信仰風土に焦点を当てた講演と対話と議論が行われました。

最終日はTTCKにほど近い慶應義塾大学先端生命科学研究所で展開されている、最先端のバイオテクノロジーを用いた研究成果や施設を見学、目からウロコの体験をしました。その後、各自で初日に作成したマインドマップを見直し、変化の様子を確認しました。また昼食を兼ねた懇親会では、セミナーに参加した感想などを発表して解散となりました（なお、スケジュールの詳細は「セミナー・プログラム」をご覧ください）。

なおレポート集の刊行に加え、関連企画として日吉図書館との共催で展示企画「第4回庄内セミナー写真展」、大学生協との共催で「庄内フェア」（庄内物産販売・庄内関連書籍の展示販売・庄内ランチの提供）（共に11月上旬～中旬）を実施しました。



「庄内文化論」講師の酒井忠久氏（上）と春山進氏（下）

全員集合（最終日）

2013 年度「庄内セミナー」報告書

参加者レポート

2013 年度の「庄内セミナー」参加者に、次のような事後課題が与えられました。本稿は、提出されたレポートを参加者の 50 音順に掲載したものです。

〈事後課題〉

1. テーマ：「生命」を考える
   庄内セミナーを通じて体感･体験したこと、考えたこと、話し合ったことなどを基礎として、各自の「生命観」（「死生観」「身体観」などでもかまいません）について述べてください。
2. 字数：2,000 字程度（これを超えてもかまいません）
3. 締切：2013 年 9 月 30 日（月）

＊本セミナーでは、「自分について考える」を事前課題のテーマとして課しました（600 字程度）。以下のレポートには、この事前課題を前提もしくは発展させた内容のものも含まれています。ただし、紙面の都合上、事前課題そのものの掲載は見合わせました。

「生命」を考える

経済学部２年　青木 佳祐

当セミナー開始直後、生命から連想するものをグループで討論する機会に恵まれた。生命とは誕生することである、生命がある以上必ず死は避けられないなど、多様な意見が出された。日常の生活ではあまり話さない生命観について議論することは私にとっては新鮮に感じた。グループで討論する中で、漠然とではあるが身体と生命には欠かせないつながりがあるのではないかと感じた。この疑問に対して答えてくれたのは３日目の山伏体験でのことだ。厳しい修行を積む山伏の行動の一部を模倣することで、私は自分が今ここで生きている、自分は一つの生命であるということを強く感じた。身体とは生命を感じるための器ではないかという結論に至ったのだ。セミナー中は今まで以上に一つ一つの生命に対して真摯に向き合うことができた。宿にて食事をとるときも、他の生物を犠牲にして、私たちは生かされていることを自覚し、人間の食物となった生物への感謝の念を自然と抱いてしまっていた。私たちは何かの生命を犠牲にしなくては自らの生命を維持することはできない種であることを意識した。食べるということは殺すということだ。日頃意識していなかったこと思いが自分の中から出てくることに驚いた。このセミナーは私に新しい視点を与えてくれた。

昔の人々が生命に対して真摯に向き合っていた跡を見学する機会にも恵まれた。セミナー２日目私達は、生きたまま大日如来と一体化するため絶食して死んでいった即身仏がおさめられている注蓮寺へ参拝した。即身仏を見たときそこにはもう生命は宿っていないはずなのに、生きている人間以上の強い生命のようなものを感じることができた。人々を救うため、即身仏となることを選んだ人が多いという和尚さんの説明も相まって、生前の強い意志が伝わってくるようであった。同日夜私たちは地元のお祭りに参加した。火を用いた祭りで、大きな松の木が延々と燃え続けるところを見学した。聞くところによると何百年もの歴史を持つ行事だということだ。力強く燃える松の木に、生命の力強さを連想した。何百年も続く習慣というのは生命を見つめるために行われるものが多いのではないかと思う。生命とは何かという問題はいつまでたっても解消されることはないので、次の世代へと脈々と受け継がれているのではないかと感じた。

生命と私たち人間と間の関係は、近代科学技術の発展で大きく変わってきていることも感じた。４日目に訪れた鶴岡タウンキャンパスでは最先端の技術を用いて、蜘蛛の糸を利用して服を作ろうとする試みなど多くの研究が行われていた。生命の英知を人間が科学技術によって私たちの生活に生かそうとしているのだ。一昔前であれば、神も恐れぬ所業と非難されていたかもしれないことが、今では多くの人にもてはやされているのだ。今これだけ豊かな生活を送れているのも科学技術のおかげであるため、もちろん私もこれらの最先端の技術には敬意をもっており、今後さらにどこまで発展していくか楽しみにしている。しかし私はひと昔前であれば、非難されていたことが、今では多くの人に褒められる行為となっているのかに注目したい。そこには人間の価値観の変化のみならず、科学技術には何らかの力があるのではないか。そんなことを改めて意識させられるセミナーであった。

当セミナー終了時に、生命について再びグループで討論する機会に恵まれたことを記しておきたい。当セミナー参加前は私も含めて皆生命というものに対して曖昧なイメージしかもてていない人が多かったが、この時は多くの人が具体的な言葉で自らの生命に対する考え方を述べていて、当セミナーのプログラム構成の優秀さを改めて感じた。私も生命とは食べることで、即ち他の生命を犠牲にしなくてはならないものだという自分なりの考えを持つことができた。具体的にいうとすべての生物は食べる・食べられるの関係でつながっているので、どの生命も軽んじることはできないということだ。最後にこの素晴らしいセミナーを組み立ててくれた方々、セミナー中意見を交わしあった参加者の方々に心から感謝の意を表したい。

私は生きてていいのだ！

社会人　赤羽 裕子

庄内から帰ってきた私の心の中に、宿った気持ちは、私は生きていいていいのだ。という自己肯定感にあふれる気持ちだった。

生きることとは、そもそもなんだ？　生き続けることとは、なんだろう？　死というものがわかっているはずなのに、一日も長く生きたいと、人が思う理由はなんなのか、それが私の疑問であった。

生命とは一般的には母という母体からこの世に生まれくることをさすのだろう。しかしそれ以前に、母の胎内に宿ったときから、いのちは生まれている。そのいのちはその瞬間から死というどんな人にも平等にあたえられた『その日』にむかって一歩一歩近づいている。たとえ胎内にいようとも……。そして、その日がいつ訪れるかもわからずに……。

胎内から産まれくるその瞬間から、苦しみと驚きと涙に人はさいなまれる。つまり今に生きることは苦しみと悲しみと悩みから逃れられず、そのなかでもがきながら、進むことを知るのだ。死という終わりのその日まで。でもなぜそんな苦労をし続けるのか？　それは喜び、楽しみをその先に知るからだ。

ある本で、現世に生きる様は、まるで大きな岩が坂の上からころがってきて、それに追い立てられるようにして坂道を走り続けることににている、と書いてあった。そのジレンマからのがれるのは、ちょっと横にそれてしまえば、その岩は通りすぎすぎさってしまう。その横道にそれることこそが解脱なのだといった。つまり煩悩を捨て去ることができるのか、それが唯一の道なのか、と考えたこともあった。

しかし、同時にそれは、楽しいこと、うれしいこと、喜び楽しみをも、捨て去ることになるのだ。たくさんの本を読んだり、美しいものを見たり、音楽を聴いたり、おいしいものを食べたり、「もっと○○したい。もっと生きていたい」と思うエネルギー、それこそが煩悩だからだ。それこそが『生きていること』なのだから。

苦しみから逃れることは容易ではない。しかし、苦しみながら、それでも生き続けていると、そのちょっと先にうれしいことや楽しいこと、ちょっと心満たされることがあるから、もうちょっと生きるか！とはげまされるのだ。

悲しみや苦しみが、現実におこったその瞬間は、全てが無になった心境に陥る。出口のまるで見えない長いトンネルに置いてけぼりにされたような気分になる。大切な人をうしなった以上にまだ、なんの試練が私には必要なの？　まわりはみんな子どもがいて、みんな優秀で、何のお金の苦労もなくて、きれいで、お家もでっかくてご主人ハンサムで、やさしくて、素敵な家族で、さらにキャリアもあって……そんな恵まれている人たくさんいるのに……もうこれ以上の悲しいことはいらないって思うのに……。なにに気づけばいいの？　何をかえればいいの？　何のばちがあたったの？　って、迷う。でも、だんだん大きく揺れていた振り子が静かに真ん中に戻ってくるかのように、自分が遣された意味をしり、気づきが生まれてくる。小さなことで他人と自分を比較して競争している自分に気づく。「なぜ？」と問いかけてしまうとそれは哀しみしか還ってこないが、「どんな意味があるのか？」と問うときに、はじめてそこから「逃げない」「あきらめない」「逃げずに必死に生きよう」と再生への道を誓う。選べる道、私が歩かなければいけない道は、いまこの瞬間踏み出す一歩しかないのだと気づく。苦しみから悲しみから、逃れるのではなく、人生は悩みであり苦しみなのが当たり前で、安定をもとめても、その安定は幻想であり、不完全で不満なことがあたりまえなのだから。ただ信じられるのは今の一歩だから。

悔しいけど、私にしかその一歩は踏み出せない。自分にしかない、自分にしかできない使命を探す旅。もうもがき苦しむのは十分だとおもうけど、やっぱり引き続き、もがく自分がいる。そして、それでいいのだと思う。

その苦しみも不満も不安も、一人では到底こえられない。それは励まし励まされることでしか越えられないことにきづいたからだ。誰かとかかわりを持つ中で、誰かとつながりを持つ中でしか、励まし励まされることは決してないからだ。誰かを愛しあいされることでしか、その心満たされ、喜びを感じることはないからだ。

暗いつらいトンネルのなかで、たった一つ明かりがともっていることをたよりに、歩き続ける。その明かりは家族であり友人であり、師であり仲間なのだ。みんながその明かりをところどころにかざして道案内をしてくれる。それが、励みになり、それが喜びになるからこそ、その人たちのためにこのトンネルを抜け出そうとエネルギーがわいてくる。

人生の長さより、太く強く一日を積み重ねる今でありたい。

自由な道には、その一歩を踏み出す選択が毎日迫られる。その選択は戦いである。学校だって、試験だって、仕事だって、戦いをさけて、生きることはできない。一方で、戦いに勝つことによって、自分の評価が決まり、自分自身もそれに向かって努力する。自分も評価を受ければ、認められたことに満足する。その背中を目指す人もいる。でも、戦いは、1度では終わらない。ずっとずっと続く。それはこわくて、つらいから、みんなその道のりから逃げようとする。でも、だれもそのレールからは、人間として産まれたからにはのがれられない。

そこには武士道で新渡戸稲造が語った深い悲しみ、苦痛、懼れ、怒り、そういった負の感情を自分の心の中におさめること《克己》が私に、ためされているのだ。

そんな時こそ目の前の恐怖やおそれに同化し、前に進める辛抱ができるからこそ、明日があると思える。あきらめないで、立ち上がる力が、宿ると信じる。戦いは、人と比べて勝つことではない、自分に勝つことだ。怠けたい自分、甘えたい自分、泣きたい自分、叫びたい自分、逃げ出したい自分。全部をひっくるめて、自分の中に納める。

そんな自分に、愛着をもって、自分を愛して、まるごと受け入れてそれでも熱く、激しく生きていきたい。みんなとともに生きる。

それはあたかも、今回の庄内での修験のようだった。なぜ修験をへて、自分が修験以上につらい現世にもどってくるのか。それは、産まれてから歩くその「死」へむかっていく道をしっかり歩き続けなければならない、と確信するからだ。

死んでいく人と、遺された人。死を知ることにより、煩悩の奴隷であると知ることで、今あることだけが「信じられる現実」であり、自分の歩いた後ろにしか道はつくられないことに気づく。

だから、私は生きてていいのだ。前に進んでいいのだ。たとえその先が見えなくても苦悩の先に希望があることを信じて。時には家族の、友人の、仲間の背中をたよりにし、その友がいることに感謝しその友の幸せを願うことで、自分の道にも明かりがともるのを信じる。いのちが自分だけのものではないことをあらためて確信したときに、今を感謝して生きぬこうと考える。

見えない未来が当たり前。ただその先の悲しみの向こう側、つらさの向こう側、苦しみの向こう側へ進むのだけが、生きること。

今、私はとてもすっきりしている。だって、私は生きてていいのだから！！！　悩み苦しみの奴隷になることなく、でも時にはちょっとたちどまって迷ったっていい、生きることこそが、私であり、それがもういいよといわれるまでは、思い切って生きていきたい。

庄内セミナーを通じて

文学部４年　浅見　愛

３泊４日の庄内セミナーに参加し非常に貴重な体験をすることができ感激の連続でした。庄内セミナーに参加する前、「自分」とは何かという事前課題を行いました。その事前課題をもとに、初日と最終日にマインドマップを作成しました。その後、マインドマップをもとに、グループのメンバーがそれぞれブレインストーミングを行いました。グループで意見を出しあい生命について多角的な側面から話し合いました。私は、初日と最終日では生命に対しての考えが大きく変化した事実に驚かされました。セミナー参加者の多くは都会生活者だったからか様々な政治、経済、社会など私が暮らしている都会での人間の作り出した社会で起こる事象に対する話題が多く論じられました。しかし、セミナー参加後はそういった社会に関する話題に加え、宗教や精神的な議論が増えました。私の中で、「生命」から派生する言葉がより多く使用されると共に、より神秘性を帯びたものとなりました。

このような変化が起きた理由は二つあると思います。一つ目は、庄内という独特の地域性を持った様々な実体験をしたこと。二つ目は、幅広いバックグラウンドを持った方々との意見交換を行ったということです。

一つ目の実体験として、私たちは講義を受け、八朔祭への参加、即身仏を拝見し、羽黒山での修験体験、藩校に訪れ、そして先端生命科学研究所などを見学しました。中でも印象的だったのは羽黒山での修験体験です。山伏の衣装を身にまとって修験道を歩き滝に打たれ、南蛮燻（炭でいぶされるという苦行）を体験しました。羽黒の山の壮大な自然の中で、普段の実生活では味わうことの出来ない体験をすることで、今までの自分が暮らしていた社会の小ささを体感しました。人間の手が入り込む余地のない手つかずの自然を目の当たりにし、この大自然が生まれた奇跡や神秘性を体感しました。私たちの生きている社会というものは物事のほんの一部のことに過ぎませんし、生命は本当に多くの事象が絡み合って成り立っていると感じました。当たり前ですが、政治や社会だけがこの世の中を成り立たせているのではなく、神や宗教や多くの軌跡が絡みあうことでこの世は成り立ち、私たちは生きているのだと感じました。

二つ目の幅広い背景を持つ人との交流ということに関して、このセミナーでは、普段出会うことのない学年を超えた学（院）生、社会人、そして教授の皆様と相互の意見交換をし、また

貴重な講師の方々からの講演を受け、非常に刺激の多い日々だったと感じています。いつも同年代の同じような環境を共有する仲間と話していることは好きですが、これとは異なる人々と交流できる機会が設けられたことで普段自分一人では考えることのないような発想や価値観を聞いて視野がより一層広がったように感じています。この体験によって、「生命」に対する認識が広がりました。

庄内セミナー参加時、私は就職活動を終えたばかりだったこともあり、ただ目の前の利益や自分の生活範囲での実社会ばかりに関心がとらわれ、周りに気を配り、ゆっくりと自らを省みる機会がありませんでした。しかし、このセミナーに参加することで、自分のいた社会を改めて俯瞰的にみると共に、生命についてじっくり考える機会になりました。初めて訪れた庄内という新しい環境の元で、新しい仲間や新しい情報、価値観に触れた毎日は非常に充実していて貴重な体験でした。世の中には知らない事や刺激がまだまだたくさんあります。そして、自分は多くの人や自然に支えられて、それぞれの事象が複雑に絡み合い、関わりながら生きているのだと実感しました。私自身の存在や生命と言うものは、非常にちっぽけで何気ない出来事ですが、この存在の背景には非常に多くの事柄が絡み合っているということに関して、神秘的であると感じます。世の中で起こりうること、生命は何一つ無駄なことはなく、あらゆることに意味があるのだと気付かされました。

庄内セミナーは、社会人になるまであと半年残された私にとって多くの気付きと忘れてはいけないあらゆる事柄への感謝とこの世に生まれて成り立っているすべての物への神秘性に気付かされる機会となりました。現代社会ではあまりに時が過ぎるのが早すぎて些細なことを忘れがちですが、大切なことは今も昔も変わらず、すべてのものには生命が宿っていて、尊い存在であるということを思い出させてくれました。

最後に、3泊4日の短い間でしたが、この庄内セミナーを開設し、運営して下さったすべてのスタッフの皆様、庄内でお世話になった皆様、一緒に本セミナーに参加し、熱く議論をして下さった皆様に心より御礼申し上げます。

「自分」とは何か

文学部３年　池田 絢音

私は庄内セミナーに、体感することでしか得られない知見を得たいという動機によって参加した。この参加動機は主に3日目の修験体験によって実現されたが、その点については本レポートの最後に述べる。まずはセミナー参加前の自身の生命観を振り返り、セミナーでの学びとの関連を述べたい。

1. 生命観―ミクロコスモスとしての自分―

「生命」とはなんだろうか。「生命」とはミクロコスモスなるものであるというのが、私の考えである。宇宙の構造と、生命の構造というものは実は相似であり、宇宙の一部である地球や自然もまた、生命と相似の部分を有しているに違いないと考えていた。宇宙の誕生まで時を遡って、生命について考えれば、惑星や地球さらに海や大地の生成とともに生命は誕生するのであり、つまり元来同じところから発生したのだろうから、同じ様相を持つのは自明である、というのがその根拠である。

さらに、「生命」は、「死」に深く関連しているといえる。生命は誕生したならば、いずれ死を迎えるもので、その意味で「生（生命）」と「死」とはセットと考えることができる。これは、セミナーの初日に「生命」を中心としたマインドマップを作成し、それを基にグループで意見交換を行った際にも、浮かび上がったテーマである。

「生命」から派生して、「自分」とはどのような存在であるかについても言及しておく。事前課題でも論じたテーマであるが、私は「自分」を認識できるのは、自分と異なる「他者」の存在があるからだと考える。だが、もし全く等しい外見と感覚を持ったクローンが誕生したならば、「自分」を認識することは困難になる。したがって、「自分」とは何かオリジナルなものの中に存在するのではないことになるが、果たして「自分」とは何なのかについては、明確な考えを持てていなかった。

以上が、セミナー参加前の私の生命に関する認識である。

2. 修験道の考え方を通しての気づき

庄内セミナーでは体験などの座学とは違った形態のアクティビティを通して、様々な知見を得た。その中で生命観がどのように変化もしくは深化したかについて述べていく。

修験道について触れておきたい。自身の生命観の深化に最も影響を持っていたと感じるからだ。修験道とは、祖先の霊が鎮

もっている山中において、その祖霊の力に近づくことも通して、超自然のエネルギーを体得しようとする道である。山中深くに入りその行を実践し、自然の力を得た人々を山伏または修験者と呼ぶ。修行ではまず自分自身の葬儀を営み、現世の自分から離れる。身につける白衣には死装束の意味が含まれる。

修験道の考え方と、先に述べた生命観を照らし合わせてみた。まず、ミクロコスモスとしての「生命」という考え方に近いものは、修験道にも存在しているようである。修験道の宗教観は自然を他者として見なさないことに根ざしている。つまり、自然を人間も生命であり、生命として一つながりのものということだ。

次に考えたいのは「生」と「死」がセットであるという見方である。すでに述べたように、修験道において山中に修行に入ることは、仮ではあるものの死を意味する。羽黒修験において、行は羽黒山にはじまり、月山山中は死の世界を意味するが、それらを経て至る湯殿山は生の地である。修行の中には、死と誕生の儀礼が含まれており、行から戻り生命は甦る。この行為は、「死」から「誕生」までを一連の流れとして捉えている。「生」から「死」を考えることをこれまでして来たが、「死」から「生」という順番で考えることは新しい発見であった。同時に、両面から考えうることが可能なことが証明されたので、「生」と「死」が密接な関係にあるという認識をより深めることになった。

「自分」とは何かという疑問についてであるが、このことについては修験体験の中で感じるところがあったので、次の項で述べる。

3. まとめ―修験体験を通して―

実際に修験の修行を少しではあるが体験して感じたことをもとに、生命観を考察する。この体験は、私の生命観や身体観を最も深めた経験であった。

修験体験をした9月1日の天気はくもりで、少し歩くと汗ばむくらいの陽気であった。白装束を身に着けて、疑死の状態に入る。体験の中でも特に滝行は私が最も変化を得た経験だった。雪解け水を含んだ滝の水は冷たく、連日の豪雨の影響か水量も多い。ただ、轟音とともに容赦なく地面に叩き付けられる水を目前にしても、その中に入ることに躊躇いや恐怖を感じなかったのは、今から思えば不思議である。白装束が気持ちを奮い立たせ、気持ちが山伏モードになっていたのかもしれない。滝に入ると、水の力は強く、私を何度も飲み込みそうになる。それがしばらくすると心地よい気がしてくる。無心になることを心がけつつも、ぼんやりと思い浮かんだのは、胎児が母親のお腹にいる状態に似ているのではないかということだった。滝の外へ出ると、まず地面の熱に気づく。それから、音の聞こえ方が滝行前と異なっていて、周囲の音がよりクリアに聞こえることに驚いた。

死の世界を体験しているはずの修行の中で、誕生に関する感慨を得たことは、意外であったが、一種のミクロコスモス体験であったかもしれず、水の中で感じた心地よさの所以は懐かしさなのかもしれない。そして滝行ののち全体的に身体が繊細な感覚を持ったことは、水と自身が一体になる、言い換えると自身が水の延長になるという経験によって、世界を生命という視点で延長として捉えることに近づいたということなのではないだろうか。「自分」とは何かという問いには、これらの気づきがヒントとなった。「自分」とは最終的には数多ある中の一つの「生命」に過ぎないのではないだろうか。私はどこまでも「自分」というものがあり、それは認識できるものだという前提で思考をしていたが、自然の延長としての自分というものを考えたとき、そこにオリジナルなものが必要だとは思わない。個であることよりも、自在に様々な形でつながるもののうちの一つなのであると考えた時、それはきっとどこまでも続いて、宇宙までも構成するのだと想像する。修験体験を通じて、宇宙の一部たることの歓びを知ることができたことが、私にとってセミナーでの最大の収穫であった。

庄内セミナーに参加して
～生命と自然、生き方について

社会人　入江 一光

今回のセミナーは、自分自身が鶴岡のことを全く知らなかったこともあり（NEC の工場があるくらいの認識）大変よい経験をさせていただいた。

まずもって、庄内藩の近代的なまた斬新な藩政策には驚いた。藩政改革には時間がかかるが教育改革を優先したこと。また、教育の基本に朱子学を選ばずに徂徠学を選択した見識の高さ。厳しい武士道の時代にあって、若者の得意不得意を尊重した教育姿勢に現代に通じる新鮮さを感じた。柔軟な考え方のもと論語を素読して行く真摯な教育が現代まで繋がる鶴岡イヅムなのだろう。

また、今回のテーマである山岳信仰を中心とした宗教観、八朔祭の荘厳さ、自然の豊かさとそれに応える文化の厚み、市井の農民の作業器具の工夫の高さ、など大変驚いた。

観光地として決して強い競争力があるとは言えない鶴岡・庄内にこれほどのインパクトがあるとは大きな発見で、その文化を垣間見た後だと藤沢文学を生み、塾鶴岡キャンパスの最先端の研究がおこなわれている土地である合理性が理解できたような気がする。

致道館が目指した教育的科学と豊かな自然を愛し、神の宿る自然を畏れる、心技体を豊かに成長できる場所。
東京から居を移され、鶴岡キャンパスで活躍されている方に羨望の気持ちを持った。

さて、本題の生命観について。以下の通り考えたことを四点に分けて報告します。

①生命そのもの～魂について

事前課題にも述べたが、私は人間の身体と魂とは別個のものであると考えている。私は先祖の魂の存在を信じていて、先祖によって、また先祖を敬い拝むことによって守っていただけると考えている。身体は魂の表現を司る道具であって身体の死後も魂は存在し続ける。とすれば、魂自身には死や終わりはないと考えることができるが、これは輪廻というものを肯定することになるのだろうか。これは現代、過去、未来を渡る三関三渡の出羽三山信仰に通じるものだ。

②生命の表現について～周りとの関わりについて

生きているということは、自分以外の第三者がその価値を認めることによってその事実や意義が顕在化することと言える。表現は芸術など具体的かつ公にその価値を定義できるものと、人間相互の愛情や思いやりなど価値の定義なく属人的なものがある。素晴らしい絵画や音楽と接することで人々の心は豊かになるし、相手を思いやることで自身の魂の成長が得られ、愛情を受け感謝することで心が休まるのである。相手、周囲を感動させること、先祖や家族そして自分に関する人々を愛することによって生命の尊さが表現されるのである。

③自然と生命～自然との共生について、自然を畏れる（＝神）

私たちは自然の中に生きている。空気、食料（動植物）、水、太陽、一瞬でも自然の恩恵を受けないことはない。特に日本人は、四季を愛し自然の現象と豊かさを生活に取り入れてきた。また、自然の脅威を神の怒りと考え畏れた。

雷を神鳴りと読んでまた雷雨があると（上空で高圧電力のため二酸化窒素が発生し肥料としての効果）農作物の発育がよいことからその放電現象を稲妻と呼び、神社のしめ縄に稲妻の形をした紙四手を垂らした。

自然の脅威は神の怒りで、それには原因があると考えて反省し、信心に努めた。

また神を畏れ、怒りを鎮め感謝の意を表すために、生贄を供することがあり、現代にも残る絵馬の風習は、生きた馬の生贄の代わりだそうだ。

自然に与えられ自然を畏れる、正に日本人らしい自然を神であるとする考え方は出羽信仰に通じるものがあると思う。

④与えられた命を生かす～今を一生懸命生きるということ

今回のセミナーは、家族が入院中であったことから参加を迷ったが、一時危篤状況の時に人生そのものを考える機会があったことから、病状の安定を確認後参加することにした。人生の時間は貴重だ。今年自分は 54 歳になる。ここまであっという間の時間であった。

仕事は十分にしているか？　家族とのコミュニケーションはとれているか？　自己啓発は？　努力は足りているか？　日々葛藤である。劣等感や不満足をごまかさずにどのようにマネージしていくか？　終わりのない作業である。

開放されて楽になりたいが、苦しい中にもそれが楽しいし、残る 30 年前後の時間のなかで日々戦っていくのが自分の人生の活かし方なのだろう。

素直に考えて堂々と生きることができれば幸福でそれを目指して行きたいと思う。

生命に向き合う

法学部（政治）２年　梅井 茉実香

私は、主観的には、死＝眠ることであるというイメージを持っていた。だとすれば、「眠る」という行為は自らにとって、とても恐ろしい作業である。にもかかわらず、人間は眠気に逆らうことはできない。むしろ眠ることは気持ちの良い行為だという漠然としたイメージを持っている。確かに眠りにつく瞬間は心地よい。そして毎日眠りにつく。死も同様で、恐ろしいと思いながらも逆らうことは決してできない。いや、逆らうというばかりか、むしろ死に近づきながら毎日を私たちは生きている。平和な日々を望みながら、単調な毎日に退屈し、ときにはスリルを求めようとする。この矛盾した性質が行き着く先は一体どこなのだろうか。先祖たちはそれを様々な視点で捉え、受け入れようとしてきたのだろう。そのような先祖の死生観を学ぶことができた庄内セミナーはとても興味深いものであった。「死」という未知なものに対して、何とか気持ちの面で整理をつけようとした人々の姿を感じ、時代を超えて、「死」という普遍的なものへの考え方から、先祖に対してある種の親近感を覚えたような気がした。

私は、高校生のときに祖父の訃報を受けて、お通夜・お葬式・納骨まで見届けたが、何か実感が湧かなかった。祖父が亡くなったからといって、私の中の祖父との思い出や存在が消えることはない。しかし、何か上書きされることもない。それはまるで、祖父の存在がピタリと額縁の中に納まってしまったような感覚である。私は母に言った。「おじいちゃんは私の中では宇宙に行ったことにしておく。もう一生会えないかもしれないけど、この世のどこかには存在している。そう思うことにする。」と。これはそのときの私なりの死の受け止め方だったのかもしれない。しかし、確かにそのとき素直にそう感じたのだ。そんな感覚は今でも変わっていない。今回庄内セミナーで学んだ日本人の伝統的な死生観に似ているような気がした。

しかしながら、現代における生命の捉え方は、伝統的なそれとは異なる状況下に置かれている。昔は、本当に純粋に、亡くなった人々が見守ってくれているなどの、魂、あるいは一種の霊的な、宗教観を含んだ捉え方一筋であり、それを100％信じて亡くなる人が大半であったのだろう。それはある意味幸福なことだといえるかもしれない。しかしながら、宗教観などが薄れ、科学技術が進歩した現代では、主観的に死を捉えるというよりも、客観的に解明していこうという時代であり、昔が死を受容する世界観であったとすれば、現代は死へ挑戦し、解明し、闘おうとしている時代である。しかし答えは見つからない。そのような時代にある我々は、個々人として生死をどう捉え、受け入れていくのかということを考えていかなければならない。そのような意味では酷な環境にいるのかもしれない。

とはいえ、生命について考えるという、日頃滅多にない時間を通した交流は、短い時間でありながら密度の濃い交流をもたらしてくれた。また、滝うちや燻体験を通して、人間は自然の一部であるということを身を持って学んだ。冷たい水は打たれているうちに冷たさを感じなくなり、とても心地の良い感覚で満たされた。最初は辛い体験も、そこにうまく身を乗せれば心を軽くしながら、歩んでいけるのかもしれないということを身体を通して学んだ。燻体験では、私たち人間は「生かされている」のだということを感じた。

そしてこのセミナーを通して、物事をみるときに、政治的にみるとか、社会学的にみるなどと同じように、視点の１つとして、生と死という側面からその話題をみてみると、面白く掘り下げられるように感じた。例えば、クジラやイルカを食すことに反対するアメリカ人と特に疑問を感じない日本人や、人口妊娠中絶に対する賛否両論の意見の根底にある、「生」とは何か。どこから「人間」になるのかという問いなどである。一番考えたくない、答えの見つからない問題に目を向けてみることで、今自分がここにいることや、周りの人たちとの幸福な時間に改めてはたと気づかされた。

様々なことを感じた今回のセミナーであったが、自らの死生観・生命観・身体観についてまだまだ整理することはできない。しかし、庄内という素晴らしい場所で、素敵な先生方や仲間たちと、あのとき感じた感覚が私のどこかで活きているようなそんな気がする今日この頃である。

「生命」を考える

商学部２年　王　沁

1、意識

世界は我々に感覚、知覚、記憶があるからこそ存在するものという見方がある。確かに世界を独立して存在するものだと考えて客観化するのが便利だけど、しかし、世界が存在するということを表現する方法としてこれは不十分ではないだろうか。それを表すためには条件が必要である。そこで表される世界の形は特殊である。そういう事象はまさに頭脳の中に反映しているものであり、極めて混乱に満たされている。ここで問題が生じる。なぜどんな特殊な性質により、頭における活動は他の活動と区別することができ、この世界の形を作り出したのか。我々が今まで発見した物質で、どんなものがこのような力を持っているのか。要約すれば、どんな物質の活動が我々の意識に直接関係しているのか。

理論的な思想はこう理解しているかもしれない。我々の今までの経験から、あるいは他のシニア動物の経験から見ると、意識というものは、それが存在している生物体内にある事象と繋がっている。つまり、ある意識が存在している神経と関わっている。しかし、動物界において、意識が起源してきたのはどの時期であり、進化中に「低級期」という時期は文明の誕生してきた中のどの段階なのか、早期の意識はどんな存在であるか、理論的な思想では弁解できない。理論的な思想においては、神経細胞や脳はある有機体において、突然に生まれた事象であり、その重要性は誰でもわかるはずだ。脳や神経細胞は非常に特殊な体制を持っている。それを通じて個体は環境が変わるとともに行為的な調整に応じる。つまり、それは環境変化に適応する体制である。あらゆる体制において、最も洗練されたものであり、最も創造性があるもの。どこにおいても、すぐ優位性によって支配させるもの。しかし、それらは唯一なものではない。数多くの生物や植物でも、それなりの方法で同じ機能を実現している。

2、生命の未来

「我々の世界に対する理解はもう結論を付ける段階にあり、もしくは究極の段階にいるともいえる。しかも、どんな面からみても、もう究極の限界に至っており、これ以上進歩するわけもない」という話をしばしば耳にするが、実際にこのような状況は存在してないと思われる。ずいぶん発展している生命科学や、哲学と宗教おける努力によっていつか我々の世界観が変わることはいうまでもない。現実に、これから次の2000年はこのペースで進めば、今までの成果はもうたいしたものではなくなる。こう語った理由は、人類の頭脳は世界を反映する思想的な器官のなかで最高級なものだと断言できないからである。人間の脳のような器官を持つ生物がいる可能性も少なくない。しかも、人間の脳より優れている可能性も必ずしも不可能とも言えない。

ただ本当にそうなれば、人間として、我々の後世はどうなるのか。もしかしたら、後世の地球はこのような事象に直面するかもしれない。地球は完全にこういう事象が発生する場所として、可能性が高い。過去の10億年、我々は最初の原始生命から現在のような形で、こういう模様に進化してきた。これからの10億年、人間はどうなるのか。現在の進化論に従えば、我々の進化するペースが停滞する可能性が高い。遺伝により体質上の変化はもう固定しているようである。ある意味で絶滅する可能性もある。ところが、例外も存在している。カメなどは原始種族として進化は止めても、まだ生き残っている。

3、進化

ダーウィンの進化論によれば、自発的な遺伝変化、つまり「突然変異」においては有利な変異は自動的に選択されるが、そういう変異は通常わずかしかない。確実に有意であっても、わずかである。ダーウィンの理論では、種族は進化するために巨大な代価を払わなければいけない。巨大な数の子孫を抱えている種族はほんの一部しか生き残らない。改良されたわずかな個体しか残る可能性がない。しかし、人間の文明にこれは適用されない。ある意味で、それと反する方に歩いている。要するに、我々は同類の痛みや死は見たくない。だから、法律や社会制度を導入する。ある面で、生命を守り、意図的に赤ちゃんを殺すことを禁止し、病気にかかった人を救う。一方、自然的な生命の選択方針が変わり、生存に適用される法則は消滅する。大昔の部族の紛争を通じた進化には選択の価値が見られる。飢餓、病気、戦争によって死亡したものと現代医療や手術に救われるものは道義において対立しているけれど、戦争や医術はともに 進化に反する選択の価値がないものである。

「生命」とは
――これまでの経験と庄内セミナーを通して感じること

理工学部２年　大西 基也

みんなで白装束を着て，自然豊かな山道を歩くとき，深い安心感を覚えた．八朔祭で燃え盛る炎を見た時，文字通り身体が震撼した．それは，いままで数えきれない人々が見てきた景色であって，その重さを感じさせられた．

いま，僕たちが立っている場所で，いままで幾人もの人たちが，葛藤し，苦しみ，涙し，喜び，笑い，決断し，恐れ，恋をし，絶望し，落胆し，夢を持ち，そうやって生きてきたということ．また，人間の生まれる何十億年も前から，豊かな木々が大地を覆い，小動物たちが生き抜いてきたこと．そして，いま，僕たちの周りには，血の通った人間が生きていて，僕たちは彼らと心を通じ合わる．随所で自然が躍動している．なんてすばらしいことなんだろう，どれだけ畏れるべきことなんだろう．

生まれた時から通っているキリスト教会の牧師から，神様の愛について教わった．おじいちゃんやおばあちゃんからたくさんの愛をもらった．そして，死んでしまったおじいちゃんやおばあちゃんの顔をみたとき，涙が止まらなくなり，心がぐちゃぐちゃにかき乱された．高校の時，意志の弱かった僕に，通っていたクラブチームの監督は，強い気持ちと，感謝の心を教えて下さった．理工学部に進学し，最先端の研究を知った時は興奮が抑えられなくなった．春学期，あたたかみを感じられない理系の学習に燃え尽きそうになった自分は，文学の授業で読んだ『チャタレイ夫人の恋人』から，身体感覚を研ぎ澄まし，「現実界」と和解することのすばらしさを学んだ．また，ある舞台俳優の先生からは，本来備わっている感情のうごめきと敏感な受信力の大切さを教わった．どこかに寂しさを感じていた僕は，途上国に行ったときには，子供たちから生きる楽しさを教えてもらった．いま携わっている学習支援では，一人一人としっかり向き合えることの喜びを知った．思い出してみると，こういうときに生きている，生きているなあという実感があったと思う．どんなに小さなことでも，ひとや自然，ものと心の奥底から通じ合い，ふれあった時，生きている喜びで満たされる．新しいものにふれ，真摯に向き合う時に，そのものに「生命」を感じることができる．

今回の庄内セミナーでは，徂徠学について学ぶことができたが，荻生徂徠の述べている「現実をみることの大切さ」というところが僕に響いてきた．ちょうど，それが僕に欠けていると痛感していたことだったからだ．この人は，おそらくこういう人なのかなと思ってしまったり，障害を持っている人の障害に目が先にいってしまい，優しく接しよう接しようという考えが先行してしまったり，学習支援の場では，「この子は勉強ができるから，問題はないだろう」とか考えてしまったり……．結局，目の前に生きている一人一人のありのままの姿，歩んできたライフヒストリー，そういうことがかすんで見えなくなっていたことに気付く．すなわち，そこに，「生命」を感じることを忘れていたのだ．舞台俳優の先生は，「演劇とは，舞台空間に生きるということ．目の前の相手に全力で集中すること，相手に動かされ，相手を動かしていくこと．それは，どうやって演じようかとか，どういう気持ちになろうか，とか自分のなかで考えるものとは正反対のことだ.」と，おっしゃっていた．いま，僕は，現実世界を生きる中で，自分がどう生きようかとか，どうアウトプットしようかということにとらわれ過ぎていないかと再考してみる．きっと，僕がこれから生きていく中で，もっともっと想像を絶するような体験をしたり，到底理解の及ばない苦しみを味わっている人たちにも会うことがあると思う．けれど，そういう時にも，「現実を曇りなくしっかり見ること」が大切だと思うし，突き詰めれば，その積み重ねこそが「生命」そのものなのではないかとも思う．

ここで，「流れ」ということを含めて，改めて「生命」を考えてみたい．今回のセミナーでは，輪廻や，マナイズムなど，ほかにも多くの「流れ」の思想にふれることができた．高校の現代文の授業では，本来どんなものも「流れ」つづけているべきであり，近代化というものは，その「流れ」を止めて，固化してしまうことだというようなことを学んだ．また，芸術というものは，自分の中にため込むものではなく，外から風のように吹き込んできて，風のように出ていくものだという主旨の文章を読んだ．まさに，「生命」も同じではないだろうか．現実界に全身をさらけだしていくこと，それが生きていくことの一つのおもしろさではないだろうか．

最後に，聖書の中から，印象深い聖句をひとつのせて終わりにしたいと思います．

「見よ，兄弟たちが共に座っている．なんという恵み，なんという喜び.」（詩編 133.1）

（ここでいう「兄弟」とは，神様の子ども，すなわち僕たちみんなのことを指します）

ご精読ありがとうございます．

「生命」を考える

経済学部３年　大宅 宏季

私が、今回の庄内セミナーを通して最も衝撃を受けたのは注連寺の鉄門海上人の即身仏です。

この鉄門海上人の即身仏に関しては２点考えさせられることがありました。

まず１点目は、そもそも即身仏になるという行為に対してのものです。

現代人にとってはいわゆる即身仏になるということは、自殺を意味しています。このようなことは断固としていけないものであるという共通認識が「ストップ自殺」運動があることからもわかるとおり自明となっています。しかし、その一方で、「われに祈願するものは諸願を成就せしめん」と言い残し入滅をした鉄門海上人のような人の行いは立派だということも理論的なものとは別に感じます。

しかしながら、そもそもでは自分が即身仏になるかといわれるとまた別の話です。確かに即身仏になれば永遠に人々を救い続けることができ、それゆえにある意味肉体は滅したとしても魂が残り続けるという西洋哲学でいう二元論のような考え方が当てはまっているかもしれません。しかしながら私には極限状態まで達していたとしても自分の命を投げ行って周りの人のために尽くすことができるのかということは考えものです。

人の役に立ちたいと思っても実際に自分の身を犠牲にしてまでそのことを行うということは容易ではありません。鉄門海上人の左目は、江戸の眼病を鎮めるためにくりぬかれていて、即身仏を見ても右目より大きくなっていました。このようなことは即身仏による永遠の命を超えた行為だと思います。鉄門海上人は特別優れた人だからということではなく、あくまでも同じ人間としてあのような尊い行為をすることはなかなかできない、「ありがたき」ことであるとともに、鉄門海上人自身もそのような人格者にもとからなったとは思えないので、上人自身も武士を２人殺したなどといった伝説のようなものが残っていますが、そこまでのことはないとは思いますが、かなり苦悩したのだと感じました。

２点目は、鉄門海上人の生きた時代についてです。上記のような尊い行いをした鉄門海上人ですが、鉄門海上人のような即身仏と呼ばれる一種のミイラは、私のイメージでは、エジプトのミイラのイメージや、即身仏という予想もつかない行為だということもあり、中世以前のものであるという印象を持っていました。しかしながら、実際は、鉄門海上人は今からほんの 200 年ほど前の方で、1829 年に入滅している。私にとってこのような近代においても即身仏になろうとする人が多かった、いや、むしろこの時代にこそ多くの即身仏が存在するということは衝撃的でした。同じ類の私にとって衝撃的だった出来事として、ベトナム戦争時に焼身自殺をすることで反戦を訴えたティック・アン・ドックという僧侶の話があります。ドック氏は、ベトナム反戦のために自らの肉体を焼くという私たちに想像さえつかない方法で反戦活動を行いました。この話を聞いた時も私にとってはかなり衝撃的でしたが、あくまでもベトナム戦争時という非常時の即身仏と同じようなもので、実感がわきませんでした。しかしながら、即身仏はほんの 200 年ぐらい前の話でさらに日本で存在したもので私にとっては実際に目の当たりにしたということもあるのでしょうが、このことのほうがより実感がわきました。

この２点から私は、鉄門海上人を注連寺でみたことにより、より生命、特に自殺について深く考えるようになりました。

ではどのように深く考えるようになったのかを次に述べたいと思います。これはひとえに「自己犠牲とは何か」ということです。庄内の即身仏は、いずれも飢饉の時期に多く誕生します。また、ドック氏は戦争に反戦する形でした。彼らは現状の社会に対して反発をするという側面をもっています。自分の保身は確かに人間に生まれてきたのだから当然求めます。しかし、人はそれとともに自分の生きている意味を探ろうとします。これが生きがいであったり、いわゆる「本当の自分」になったりします。彼らにとっては、一つには生きがいを他者への配慮で持ったと考えられます。

しかし、それだけではなく、他者への「愛」があったのだと思います。これは哲学でいう「アガペー」であり、「慈悲の心」なのだと考えられます。たとえば、お年寄りに席を譲る行為、これは「愛」のある種の見える形です。私は、彼らのように命をかけて他者を救うことはできません。しかし、身近な範囲で自分にできる「愛」を広めていくことができたらよいと思いました。

「生命」を考える

経済学部２年　荻野 真平

生命について考えるというのが今回の庄内セミナーのテーマであった。庄内地方の風土に触れ、自然や風土の持つ生命というものも感じることが本当に貴重な経験であったが、生命というテーマに対して、庄内セミナーに参加して得た人間としての「死生観」についてセミナー全体の感想等も交えながら述べていきたいと思う。初日のマインドマッピングの作業、グループでの話し合いでは、死後の世界への意識というものは私自身希薄であったと思う。そしてグループの誰かが発言した「命は何よりも大切なものである」という意見は至極当然のように思われた。しかし４日間のセミナーを通して、自分の身体観や死生観が少し変わったように思われる。まず、なぜ命は大切なのか？という疑問である。自分なりの答えとしては、命は与えられたものであり、生きているからこそ喜怒哀楽も感じることができる。与えられた命を活かすことが本当の意味で命を大切にすることであるとする。平平凡凡の毎日を送っていても、命の輝きはない。致道館で学問を修めた先人たちも学問を通して、日々己を向上させようとしていたはずである。また、過去未来にとらわれすぎることなく、只今に生きようという神道の精神にのっとり、気持ちを日々新たにして成長していくプロセスになんとなく生きていく意味があると感じた。

死後の世界は死んでみないと実際わからないので死は観念に過ぎないとよく言われるが、庄内の信仰風土に触れてみて、村上春樹の小説、ノルウェイの森の一説を思い出さざるを得なかった。

「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。」（ノルウェイの森上巻　村上春樹　1987 年）

というのも、庄内における、出羽三山信仰や即身仏、また、33 回忌が過ぎた先祖は共同体のカミになるという祖霊信仰は生と死を対立概念として考えていないからである。むしろ、死は生の延長線上にあるかのような生と死のつながりを強く感じたし、死は終わりではなく新たなはじまりであるという庄内の信仰風土が、山伏修業の擬死体験にも、庄内地方を舞台にした映画「おくりびと」にも本当によく表れていて、印象的だった。おくりびとを見た人はイメージがつくかもしれないが、ところどころに散りばめられた映画のシーンに出羽三山信仰と結び付けられた意味が込められているという解説を聞いて、つくづくなるほどと思わされた。しかしなぜ、このような信仰風土が生まれたのであろうかと考えるとき、自然と人間は切り離せないものだということがわかる。日本の信仰の原型は山岳信仰であり、その原型が東北地方、特に庄内地方には色濃く残っている。自然に対する意識が希薄になっている現代に生きている我々に、庄内という土地は生と死を強く訴えてくる。ここで、即身仏に関連して、我々の身体について今回新たに考えたことについても述べてみたい。人間を肉体という観点のみで見た場合、肉体の死はすなわち人間の生命の死を意味することになろう。しかし、即身仏を見て、肉体はあくまで魂の器なのかもしれないと思った。アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」を例に考えるとわかりやすいかもしれない。つまり人間という存在を肉体と精神意識（魂）の二つの構造から捉えるのである。エヴァはコアとなるチルドレンがいなければ動かない。人間も核となる魂がなければ、真の意味で生きていると言えないのではないか。人間の精神性はどこに由来するかについては、人間の脳の話が欠かせないと思うが、日本の大脳生理学のパイオニアともいえる時実利彦の著書「生命の尊厳を求めて」（1975 年 みすず書房）に詳しい。話を戻すと、人間を肉体と魂という二重構造で捉えたとき、庄内地方の信仰風土も一通り、納得がいく。

人間は性善説や性悪説などの単純な側面のみで捉えられるものではない。肉体がある以上、煩悩を完全に消すことは不可能であると空海も言っている。重要なことは煩悩といかにうまく付き合っていくかであり、魂を向上させていくことである。論語を読む猿はいないし、芸術を理解する犬もいない。人間だけに備わった精神性というものが確かににあることは疑いの余地もない。それらを向上させていこうとするのも人間だけである。煩悩とうまく付き合いながらもそうやって魂の求める方向に生きていこうとするのが人間だ。しかし肉体があって生きているからこそ様々なことができるわけであるから、改めてそうした意味で「命は大切である」と結論付けたい。また、山伏の方には申し訳ないが、滝に打たれたり、山にこもることだけが修業だとは、もはや現代では言いにくい。今から俗世を捨てて出家するというなら別であるが、我々は現代のグローバルな時代を生きていかなくてはならない。だとすれば、本当の意味での修業とは何か自ずと見えてくるはずである。

多少抹香臭いと感じられるテーマではあったが、日本人のDNA の中には庄内の風土と共通した思想が少なからず入っているものだと思うし、目も眩むような資本主義社会のなか、人々は外へ外へと意識が向き、人間理解や内面を見つめることをややもすれば忘れがちで、自分のことしか考えていない人も多い。庄内セミナーに参加し、答えのないテーマを真剣に考えてみたことによってこの先の大学生活、その後の人生も新たな視点を持って、より豊かに生きていける気がしている。なにより、山形の田園風景や空気がとても好きになった。

「生命」を考える

社会人　長田 俊彦

はじめに

今回この庄内セミナーに参加したきっかけは、今年入学した娘からの紹介が大きかったです。鶴岡出身の自分が、今さら鶴岡のことを紹介されてもほとんど知っているはずだからという思いで気にしていませんでした。

でも、そのことが余計に気にかかり、鶴岡のどんなところを学ぶことができるのだろうか。もしかしたら、自分が全然知らない鶴岡を知ることができるのかもしれないとの思いから参加しました。慶應大学とは全く関係のない一般社会人ですが。

「生命」を考える

庄内セミナー初日のマインドマップ作成でもこのテーマが出てきましたが、私はこの中で大人が子供をいじめや虐待などで死に至らしめているニュースを見る度に、そして後を絶たないことを憂んで、連想することを書き込みました。そして社会現象からすれば、いじめを苦にして自殺する子供たちが後を絶たないニュースも度々目にすることがありました。

対をなすように、上の娘が昨年他大学の医学部に入学したことからも余計に意識を強く思うようになっていました。

現在の日本は、少子高齢化でこれからの日本を担う子供たちを大事にしていかなければならないはずなのに、子供の命を粗末にしている現状を日頃から強く憂んでいました。土地は人によって支えられ、ましてや国はその人々の命によって支えられていると言っても過言ではありません。

事前課題でのテーマは、「自分の存在」でした。私はこの中で、回りがいることで自分が助けられ、自分もいることで回りを助けているんだということで結びました。人間は、一人の力では本当にちっぽけですが、たくさんの人がいることによって大きな力となっています。大震災の後では、色々な方が助け合いをしていました。その中の１つに、オペラ歌手のプラシド・ドミンゴが日本でチャリティコンサートを開いた番組を放映し、最後に「故郷」を日本語で歌っていたのを観てとても感動してしまいました。観客は何人もの人がハンカチで目を覆っていました。きっと思いはみな同じなんだなと痛感しました。日本を助けたいと思っている方々は世界中にいるんだなということをその番組を通じて知りました。

自分が考える「生命」とは、決してぞんざいな扱いをしてはいけないもので、大切にしなければならないものだと思っています。

セミナー２日目に即身仏の見学をしましたが、まさに即身仏となった上人は人々を苦しみから解放してやりたいとの思いから、自分の命と引き換えたものでありました。到底まねなどできませんが、ここでも命の大切さを痛感させられましたし、また人は回りの人達に助けられて生きていると同時に、自分も回りの人達を助けて生きているのだとあらためて感じさせられました。このことは、山伏体験での最後に、先生の講和の中でも言われていましたので思いは自分と同じなのだと思いました。

山伏体験は初めてであり、中でも南蛮いぶしは以前 TV 番組のドキュメンタリーでも見たことがあったので相当苦しいことは想像していました。実際に体験してやはり相当の苦痛を実感しましたし、参加した皆さんも感想の中で、山伏体験を通して普通の平凡な生活ができることがどんなに幸福かということを今さらながらに実感したと口々に漏らしていました。まさに澄んだ空気を吸うことができるなんて何と幸福なんだろうと思うようになっていました。

藩校致道館では、幕末の庄内藩士が活躍したことを聞きました。このことは、自分が高校時代にも社会科の授業で習っていて、何故に庄内藩士が屈強であったかも習っていました。講義の最後に、戊申戦争時に官軍方の佐賀藩副島種臣が庄内人の気風は「沈潜の風」だと言っていたということを初めて聞きました。その意味を解説いただきとても感動してしまいました。まさに庄内人はその一言に尽きると思っていますし、できることなら何故庄内人の気風がそのようになっているのか歴史的なことからも知りたいと思う気持ちが強くなっていました。

致道館での最後は、庄内論語の素読を全員で行いました。温故知新など２つか３つは高校の授業で習ったことであるから馴染みがありましたが、ほとんどは初めてのものであり意味もわからず、ただ全員で大きな声で素読を行うことだけでした。今は市内の子供達が次々と課外授業としてこの致道館で論語の素読を行っているということ聞かされ、自分が子供の頃にはなかったことなのでとても良い取組だと思いました。何故ならば以前、森敦の自伝小説の中で子供の頃に韓国で過ごしていた時代に、親の勧めで論語の素読をしたそうです。小さい頃であったため意味は全く分かっていなかったそうですが、そのうち暗記できるほどになっていたそうです。この経験を通して、「頭が良くなったような気がした。何故だかはわからないが」と言っています。自分が小さい頃に、論語の素読をしていなかったのは、親を恨むか自分を後悔していますが、今の鶴岡の子供達は機会が与えられ幸せだと思います。そう言えば藤沢周平の映画「たそがれ清兵衛」でも、主人公の子供が論語を習ったと素読を行う場面がありました。

子供と論語の素読とは何か縁があるのですかね。

そして最終日のTTCK先端研での紹介の中で、地元の子供達と一緒に研究をすることですぐれた人材を育てていることを知りました。将来に向けて、次の世代を育てている姿勢を知り感動しましたし、こうしていかなければならないものだという気にさせられました。

命とは尊いものであり守らなければならないものだし、自分が回りへの思いやりによって回りも助けられ、そして何時かは自分も助けられます。これからは、子供達の将来に向けて様々な環境作りやっていかなくてはなりません。それがグローバルに展開できれば、全世界から争いがなくなり平和で知力溢れた世界を築くことができるのではないかと思っています。

最後に

紙面を借りて本セミナーに参加しての感想を述べさせていただきたいと思います。慶應大学生と慶應大学についてです。

私は冒頭でも述べましたが、慶應大学とは全く縁もありませんが今年、娘が入学できたことで俄かに親近感を持つようになりました。

本セミナー参加の慶大生は、廊下ですれ違っても何時も挨拶をしてくれてとても気持ちの良いものでした。それが、さっき挨拶したばかりなのにまた逢うと挨拶をしてくれます。年の差など関係なく極自然にしてくれるので、まるで自分が会社の偉い人にでもなったような錯覚を覚えました。きっと伝統的に普段の接し方など自然と教育されているんだろうなという気持ちにさせられました。

そして、最終日の先端研での紹介でもとても感動を受けました。そもそも慶應大学と鶴岡市がどのようなつながりがあるのか不思議でしたが、そのいきさつなど伺い、たまたまラッキーだったのではないだろうかと思いました。きっと、他地方でも同じような誘致話があれば同じことが成立していたのではないかと思うので、その意味でも、慶應大学が鶴岡を選んでいただいたことには本当に感謝しますし、関係者の方々にも感謝の念にたえません。

先端研の話を伺っていると、地元に根差した活動をされていて本当に地元と先端研がまるで家族のような関係にあるのではと思われ、色々なことで庄内に貢献されているのだと思いました。そして地元の子供達と関わり、素晴らしく成長している話もあり心が打たれました。おそらく、何10年後には先端研からノーベル賞受賞者がでてきてもおかしくはないと思いますし、いずれ庄内出身のノーベル賞受賞者がでてくればこれに勝る喜びはないと思っています。鶴岡出身の自分も、いつかは鶴岡へ恩返しができれば良いなという気持ちが強くなりました。

それにしても、慶應大学の懐の深さを思い知ったような気がした庄内セミナーでした。それに学生のレベルが高く、何時卒業しても社会人として立派にやっていける人材教育をしているんだなと思わされました。娘も今後慶應大学を卒業して、どんな人材になっていくんだろうとの期待が強くなりました。

今回の庄内セミナーを通じて、自分の知らない鶴岡を知ることができましたし、慶應大学のことも少し知ることができましたし本当にありがとうございました。今後も何かの機会に、慶應大学のことをもっと知るようになりたいという思いが強くなった庄内セミナーでした。ありがとうございました。

自分の「生命観」について考える

理工学部２年　小田 武春

私がこのセミナーに初めてであったのは食堂で毎年やっている朝食サービスでもらった１枚のチラシでした。山伏体験？何それと思ったのが最初に感じた素直な印象でした。しかし、先端生命研究所を見学でき、以前から東北に行ってみたかった私は軽い気持ちで応募することにしました。まず手こずったのは事前課題の「自分という存在について」でした。今までこういった哲学的な考えについて考えたことはありませんでしたので、大変困りました。しかし、自分について振り返るいい機会でした。

さて、とうとうセミナー当日がやってきました。最初に言い渡された課題は各々の生命観についてのマインドマップ作りでした。私は生命について深く考えたことはありませんでしたが、必死に考えて出てきたことは理系的なことばかりでした。医学や生命工学、自然などについてです。周りは老いや死についてなどを書いていました。しかし、その中で皆が

書いたものとして「つながり」というキーワードが共通していることが分かりました。例えば、「親から子へ」、「食物連鎖」、「人は何かの生命を犠牲にして生きている」ことなどです。このマインドマップ作りだけでも私の生命観は広がりました。これからいろいろな人の話を聴き、体験すれば最終日のマインドマップはどうなるだろうと思いながら、鶴岡タウンキャンパスを後にしました。

2日目は即身仏を見に行きました。私は即身仏とはこのセミナーを通して初めて知りました。事前に調べた時点では即身仏＝ミイラと思っていましたが、正確には違うものでした。私は、その時点まで人は死に抗いながら生きていると思いましたが、即身仏になった人たちはまず始めに死ぬ日（土に埋まる日）を決めて、そこから修行期間を決めると聴き、驚きました。なぜ、死ぬ日を決め、さらに死ぬと決めているのに修行をするのか大変疑問に思いました。しかし、私は理由を聴き納得しました。即身仏はある一定の期間以上の苦行を体験した者のみなることができたと学びました。もちろん修行中に亡くなる人もいました。しかし、即身仏になることは仏教の修行の中でも最も過酷であるが、この人たちは死を死として捉えるのではなく、永遠の生命の獲得を目指していると言っていました。そのような生き方があるのかと、まさに今までの自分の考えにはなかったものです。私はそのような生き方は正直に言ってしまえば嫌ですが、それほど当時の信仰が強かったことが分かりました。そして自分とは違う生命観に触れることができました。夜は八朔祭を見学しました。実に壮大な光景であり、ついつい見入ってしまいました。その際、八朔祭の参加者たちが「うけたもう」と繰り返し言っていることが気になりました。

3日目はいよいよ山伏体験でした。まずは白装束に身を包み、整列をしました。その際、先達から名前を呼ばれる時や返事はすべて「うけたもう」と答えなければならないことを知りました。この時、八朔祭で言っていた意味がやっと分かりました。山中ではすべての返事は「うけたもう」。これが山伏の絶対の掟でした。厳かな雰囲気の中、最初は人生初の滝行を行いました。自然にできた滝でやるのかと思いましたが、人工的な滝でした。さらに、気温が予想以上に低かったです。しかし、そんなことも関係なく滝行が始まりました。初めは水が冷たくて、早く終われと心の中で念じていましたが、そのうち水の冷たさにも慣れ、邪念も取り払われ、まさに水と一体となる感覚を得ることができました。最後はもっとやっていたいと思ったほどです。滝から出ると小さな達成感とともに、体が芯から温まっていくことを感じました。その後は羽黒山の杉並木を歩き、施設に戻りと床固めと南蛮いぶしを行いました。とくに、南蛮いぶしは大変苦しいものでした。これは密室で唐辛子や蓬、その他の薬草を乾燥させたものを、七輪の上で焼き、煙を部屋の中に充満させるというものでした。部屋には正面にろうそく1本と後ろで七輪を焼いてる先達がいるだけでした。最初はこんなの楽勝でしょとか思っていたのも、束の間でだんだんと煙は部屋に充満し、部屋のあちこちから咳が聞こえてきました。僕も1回だけ咳をしてしまいましたが、そこからが辛く、咳をすると空気を吸い込み余計に悪化するという悪循環に陥ってしまいました。てっきり僕はろうそくが燃え尽きるまでかと思っていたので、まだかまだかと思いつつも、ああ、まだあんなにある・・と思っていたところ、ろうそくはまだ残っているのに終了の掛け声が聞こえ部屋の出口へと急ぎました。思ったよりも早く終わり、あっけなさも感じましたが、一番きつい修行でした。山伏体験の最後は火渡りでした。焚かれていた火を飛び越えるものでした。火渡りをすれば生まれ変わるという言い伝えがあります。無事に飛び越え、意識的な面で生まれ変わりができ、山伏体験を終えることができました。

最終日は先端科学研究所の見学を行いました。実は僕はこのセミナーに参加すると決めるまで、鶴岡に慶應のキャンパスがあることは知りませんでした。しかし、良い意味で予想以上に素晴らしい研究を行っており、今後の学習に良い刺激をもらうことができました。

最後のセッションは2回目のマインドマップ作りでした。2回目のマインドマップでは、いろいろな人たちの話を聴き、様々な体験を終えた後では即身仏などの地域信仰的な考えや宗教観などが広がっていたことに気付きました。例えば私はセミナーに参加する前は人は最初に生があり、死で終わると考えていたが、人は死ありきで人生を捉える事ができるということを学びました。また、枝分かれの数もかなり増え、様々な人物のお話や体験を通して、自分の考えはこんなにも変わるのかと素直に驚きました。

私は軽い気持ちで応募しましたが、最終的にこのセミナーに参加できてよかったと心から思います。何より今まで関わることの少なかった文系学部の人たちや教授方、講師たちなどとの会話やお話は大変刺激になりました。私は違う価値観を持った人たちと関わるということは自分を成長させる一つの方法だと思っています。このセミナーには学部も異なれば、年齢層も幅広く様々な価値観を持った人物たちと出会うことができました。私は、このセミナーを通して自分の生命観はもちろん、様々な面で成長することができたと思っています。最後にこのようなセミナーを提供してくれたスタッフや関わった人たちに感謝の意を述べたいと思います。ありがとうございました。

死生観について

社会人　栗田 優一

庄内セミナーに参加させて頂き、普段とても体験できないような貴重な経験をさせて頂いた。即神仏拝観や山岳信仰の現場を目の当たりにし、庄内に住む人々の営みや歴史の一端を知るとともに、山伏修行のミニ体験もした。日常生活の忙しさにまぎれ、正面切って向かい合うことの少ない生と死についてもあらためて思いを巡らすまたとない機会となった。

自身や家族の生活の糧や安全を、さらには快適さや楽しさを求め日々汲々として仕事や家事に勤しみ、日常生活を営んでいるのが大方の人達にとっての現実であろう。自分自身もその例外でない。こうした日々の生活に気をとられ、また思い悩む一方で、自身が存在する自然環境、地球環境、宇宙の仕組みなど、日常生活からは一見大きくかけ離れたかのようにみえることに時折思いを巡らすことがある。最近では科学者の努力により地球や宇宙に関する研究が進み、これまで全くわからなかったことがいくつも解明され、人智は広大な宇宙空間や未知のミクロの世界へと急速に幅を広げている。

この世のすべてのモノはミクロに見れば、分子、原子、素粒子などの物質からなりたっている。それらが複雑に絡み合い物質をそして生物を形作っている。人間の身体も同様である。地球以外にはたして生命体が存在するのかまだ確認されたわけではないが、究極的にはこれらの物質で全宇宙ができていると考えられている。

先日 NHK で『神の数式』という特集番組が放映された。「あらゆる自然現象は、最終的には一つの数式で説明できるはずだ」と科学者たちは長年信じてきたが、 最近発表された「超弦理論」の数式は、すべての物質を書き表す「標準理論」と「一般相対性理論」とを包含し、夢の数式「神の数式」に大きく近づいたと紹介している。その「超弦理論」の数式からは、全宇宙は実に 10 次元の世界であることが導き出されるそうである。4 次元の世界に棲む凡人には少なくとも感覚的には到底理解できない世界だが、それが全宇宙の姿であるようである。

赤ん坊として誕生した人間は、幼児、少年、青年、壮年、熟年、老年の時期を経て、やがて死を迎え、一生を終る。死により自力活動は停止し、「命のない」物質に変化する。人間の身体は、物質的には水素、酸素、炭素、窒素で 99％が構成されているそうである。「死」はあたかも有機体として統制のとれていたシステムが、 突如として機能不全となり、バラバラの物質に分解され、「生命」が失われたと状態と言える。「死」は物質面からドライにみれば、人間の体を構成する脳や臓器が機能を停止することであり、構成要素の物質が時を経て化学変化を起こし、他の物質へと分解・変化し、「土に帰る」のである。さらにミクロにみれば、水素、酸素、炭素、窒素などの構成要素が組合せを変えて新たな物質へと変化していく循環過程のひとつに過ぎないと言えるもしれない。

人間にとって、超マクロの世界もまた超ミクロの世界も、まだまだ未開であるが、自身が日常生活を営む狭い世界の中で、生存をかけ、またより良い生活ができるよう生きて行こうとしているのが現実である。また、それなしには生命を維持し、子孫を残すことができない。本セミナーでは、平時には食物の豊かな庄内にあっても飢饉や自然災害などで多くの命が失われた、また人々の生活を豊かなものとするために古くから数々の努力がなされてきたことが語られ、それを学んだ。この地域では、人間がまったくと言ってよいほど自然の仕組みを理解し得なかった時代から、自然への畏怖の念もあってか、山岳信仰が栄え今日まで多くの人々の心に継承されている。宇宙の営みの一端が人智により解明されつつある現代にあっても、人々の信仰を集め、古くからの風俗習慣が伝承され、守られているのは、単なる物質循環の世界観とは異なる次元の世界であり、そうした見方からだけでは到底理解できないものを強く孕んでいるように感じた。

人間の一生は、寿命が延びたといわれる現代でも高々 80 年程度である。宇宙誕生以来 137 億年、地球誕生以来 46 億年はおろか、人類数百万年の歴史に比べても、、まさに一瞬である。個々人にとっては波乱万丈の長い人生であっても、宇宙のスケールから見れば、地球の片隅での瞬時のことであり、極々小さな物質循環の出来事でしかないのであろう。宇宙から地球を眺めた宇宙飛行士は、思わず「愛おしさ」を感じるという。絶妙なバランスの上になりたつ地球環境の下での生命の誕生、そして繁栄は奇跡のなせる業であると感じざるを得ない。人間の「狭い生息領域」は広大な宇宙とは比べようもなく、また足下の超ミクロの世界さえ十分に覗き見ることは現状では到底できないが、生命とは何か、人間とは何かを問う起点であり、その人生観、世界観、宇宙観が個々人にとっての生きる意味を形作って行くものと考える。その意味で今回のセミナーでの体験は良いきっかけを与えてくれた。生命とは何か、人間とは何か、生きるとは何かを問い続けているのが今日の人間の姿であり、おそらく未来永劫問い続けていくのだろうと思う。

“生命”とは

経済学部２年　児玉 隼平

私がこの庄内セミナーを通じて考え出した「生命」というものの捉え方は、「生命」は「死」と「進化」という２つの概念と大きな関わりがあるということです。

生命というものは「死」ということと、コインの裏表みたいなものであり、新たな「生」が生じた瞬間、「死」という避けられないものが表出します。「生命」を我々が与えられた理由としては、より良いものを生み出そうとする生物が生来的に持っている性質の帰結つまり、「進化」の一部となるために生み出されてきたと思います。

具体的に述べれば、「進化」という概念は二つの視点から捉えることできると思っています。

それはマクロからの視点とミクロからの視点の違いということです。

マクロの視点から捉えると「死」いうものは生物の発展という意味で「進化」するということです。「死」という事象を生物種という大きな概念で見たときに、一個の個体の「死」というものは、終わりではなく、次世代がよりよいものを生み出す過程で貢献したものとみなすことができると思います。またそう考えると、一個の個体は永久に影響力を持つ存在となり、一種の永遠性を持つと考えられます。

また、ミクロの視点から考えると「死」という点は自分が成長し、集約されたものとして”達成された瞬間”だと考えられます。”達成された瞬間”というものをもう少し深く突き詰めていくと、例えば、即身仏のように、そのような存在になるように自分を律しなければ、あのような形で終止符を打てないものに象徴されると思います。生物、特に人間というものは過酷の先にある、喜び、達成感というものを生来的に希求していると思います。その理由としてやはり挙げられるのが、その過酷さを耐え乗り切ることで自己の成長、進化というものが自分の内面、外面で確認できるからだと思います。その結果、日々変化、成長した結果たどり着いた最終的な形態が「死」という一点で表現されるということです。確かに身体面では老いというものの結果、個体は衰退するかもしれませんが、精神面では人間という思考能力を持ち、自己の将来を見通すことができる生物にしか可能ではない精神の成熟というものが「死」という点で完結されると私は考えます。

そしてもう一つ「進化」という概念でこのセミナーを通して学んだこととして、「進化」を人為的に促進するということも可能だということです。それまでの「進化」と大きく異なり、この「進化」は遺伝子を組み換え、操作し、人間が欲するものを創りだしていくということに私は純粋に畏敬の念を抱きました。確かにこのような技術は様々な懸念がつきまとうとは思います。ただ、それまで何世代という月日を費やし、進化を遂げなければ目に見える変化とならなかったものが、たった1、2世代で可視化される能力を持って生命を受けられる時代になったことは素晴らしいと思います。進化が進化を生み出し、加速させていく、さらなる完全体に近いものを生み出していけると思います。

私の中での、生物が「生命」を与えられた理由としては「死」を通じて「進化」を成し遂げていくことだと感じました。それこそが本来的な生物のあり方であり、捉え方の違いで差異は生じようとも根幹となるべき観念は自分の中で明確化されたかなと、このセミナーを通して結論づけられました。

「生命観」を考える

経済学部２年　佐藤 友弥

私は８月の終わりから９月の頭にかけて計４日間の庄内セミナーに参加してきた。庄内の風土を肌で感じつつ、庄内伝統の死生観を細かく学んだ。セミナーを通して気付いた新しい発見が２つある。一つ目は、グループごとに作成したマインドマップである。マインドマップとはキーとなる単語から関係のある単語を放射状に線と線で繋いでいく作業の事である。放射状の線の末端とキーのテーマとで関係性を持つということなのだ。このセミナーではもちろんキーとなる単語はテーマである「生命」であった。自分の班では、生命という単語から宗教観念に飛び、最終的に「神」など概念的な単語に繋がった。また格差という単語からは、地域性に飛び、着地点として「他者との関わり」に繋がるなど他にもありとあらゆる単語に繋がったのである。ここで着目したいのが、生命という単語は「宗教性」や「関わり」などありとあらゆる単語を含むということである。つまり生命とは何かを考えるにあたって、考えをまとめるにはマクロ的視点とミクロ的視点に立って捉える必要性があるということである。この事実を確認した後、もう一度、班ごとの議論に戻ってマクロ的な視点とミクロ的な視点で改めて生命とは何かを考えてみた。そして自分の班で得られた結論がマクロ的視点では、自己以外の生物を食して生きていくという生命活動と自己以外の生物に食されて死を迎えるという一連の関係性こそが「生命」を考えるのに重要なことである、とするものである。この考えは、映画「おくりびと」の「生きるためには食べるしかない。食べるなら美味いものがいい」というセリフにおいても描写されており死者と向き合う職業の人が生について語る、つまり生と死の関係が目に見える印象深いシーンである。この考えに則って庄内平野において独自の生命観が発展したという事実を考え直すと、四方を森林に囲まれていてありのままの自然に触れることが出来るからこそ生と死の瞬間を常に捉えることが出来たからだと納得できる。また、ミクロ的視点では他者との関わりを通して自己という存在を認識することこそが生命を意識できるというものである。自分とは何かという事前課題でも議論したことだが、自己の存在とはありとあらゆる他者に応対する時のそれぞれの自分を総合したものだと思う。つまり、他者との関わりを通して初めて自分という存在や自分の考えを認識し直せるのである。自分の存在を堂々と認識できている時こそが最も生をありのまま感じるのである。他者との関わりは家族という小さな規模から地域という一種のコミュニティにまでも広がり、互いの考えを共有し合うことで伝統、文化、宗教などの地域性が生じるのである。全く異なる他の文化と交流するときに楽しさを感じるのは相手の文化を共有することで自分が育ってきた文化を客観的に捉え直せられるからである。次に、修験体験を通して気づいた二つ目のことは、人間という生物は失って始めてその大事さを気付くということである。３日目の修験体験は名の通り体験であるので本物の修行に比べればある程度易しくなっているはずだが、十分に自己を見直せるほど過酷なものであった。修行の主な目的は聞いた話によると、生活で常に共にあるものを一旦無くすということである。例えば、滝行はとても冷たい冷水を生の肌で当たることで体温を極限まで失くすことであるし、南蛮いぶしは鼻や喉に攻撃性のある煙が充満している部屋に閉じ込められることで呼吸が普段通り出来なくなる、つまり空気を極限まで失くすことである。確かに、普段気にせず用いている体温や空気をたった一つでさえも極限まで失くすだけで日常生活は疎か、ただ単に生きるという生命活動にまで影響を及ぼすのである。私は修行の最中、寒さや呼吸の苦しさを必死に耐えようとするときに確かに生きていくことの辛さを文字通り肌で感じた。また、全ての修行を通して言えることであるが、修行が辛いのは勿論だが、辛いのと同時に無心になることができることである。滝行で意識が飛びそうになった時も、別の自分が冷静に今の状態を把握していたようであったし、煙に燻せられているときも必死に目を閉じ呼吸を静かにする反面、頭の中は冴え渡っていた。無心な状態になると、この場合は危険な状態になると自分の存在やその場での状態などを客観的に把握できるように感じられる。つまり、他者との交流を持った時と同じような気分になるのである。最後に、今回、庄内セミナーは大学の掲示板を見て思い付きで参加したため、単独での参加になってしまった。４日間だけのセミナーだから深い繋がりなど出来ないだろうとある意味投げやりな気分でいたが、結果は全く予想と反するものであった。セミナーの参加者は学年、学部が異なる人はもちろん、社会人の方や引率の教授の方まで様々な人々で、普段は正面を見て話し合うことなどない人々とテーマである生命観を熱心に議論し合うことは痛快で楽しい経験であった。この４日間という短い期間でさえも人との交流は「生きて行く」上でとても重要なキーな事であると深く学んだ。

生命“力”というものがありそうだ

経済研究科２年　塩澤　翔

庄内セミナーでは庄内の歴史とともに生命とは何かというテーマを考えた。修験道や即身仏といった過去の生命観に触れる一方で最先端のバイオテクノロジーの研究機関の見学もしてきた。過去と未来のような複数の視点からとらえることで生命というものを深く考える機会となった。

まず、きわめて単純に科学的な現象としてとらえた場合、生命とは適切な化学反応が起こり続けている状態であるといっていい。呼吸や代謝というのは詰まるところ化学反応の連鎖なのである。

一方でその適切な化学反応どころかそこから生まれる産物すらも現在の科学によって人工的に作り出すことはできていない。昔から今まで食べ物は他の動植物に頼らざるを得ないままである。たしかに家畜や穀物を効率よく育てる技術が格段に進歩したとはいえるが、あくまで動植物を育てる技術であり食べ物そのものは作れていない。

コンピューターがなくても生きていくこと自体は可能だが食べなければどうしようもない、ということを考えれば人間は全くほかの生命から独立できていないといえるだろう。

また人造石油や人造クモ糸繊維などの新技術もできてはいるものの、それらの技術も最終的には藻や微生物などを利用した技術である、という意味では生物に頼った技術と言っていい。

これらのことを考えたとき、単純な化学反応としてとらえるだけで生命というものを考えることは難しいのではないかと思う。

陳腐な言い方にはなるが生命の持つ力というものを考えなければ生命というものをとらえきれないだろう。

昔の人々は科学的な知識が現代より乏しい分「生命の力」という考えをより鋭敏にとらえられていたように思える。死を再生の始まりととらえるとともに死者がカミに変化すると考えていた。死後すぐの霊は荒霊と呼ばれる危険な存在を経て安全なカミである和霊に変化していくといわれている。

一方でこの言葉はカミの状態を表す言葉でもある。カミの状態は安全な和霊と危険だが強力な荒霊という状態に分かれているという。祭りというのはこの和霊を一時的に荒霊の状態に励起しそのエネルギーを分けてもらおうとする儀式である。荒霊のような危険だが強力な存在というのが自然、あるいは生命でもあるように私には思えてならない。たとえば台風のもたらす強風と豪雨は多くの人や動物を危険にさらすが、一方で植物の種を遠くまで飛ばし、山に大量の水をもたらすものでもある。

少し変なたとえになるが、原子力のような発想でとらえていたのかもしれない。何らかの方法で生命力を励起し、活発な状態にすることで発生するエネルギーを利用しようというものである。一方で危険なものかもしれない、というところまで含めても原子力と似ているなと感じた。

生命が危険なものという感じはあまりしないかもしれないが、たとえばアイヌ人たちはクマを神の一種のように考えていた。これはクマが人を襲う危険であると同時に希少なタンパク源でもあったことと無縁とは思えない。

同じように古代の山岳信仰に始まる修験道なども昔の人々の生死観を考えるヒントとなりうる。修験者の修行というのは山に入り一度死に、再びよみがえるという過程をなぞるものらしい。これも生と死の間を行き来するようなことによって生じる大きなエネルギーを取り込もうとする修行だと思う。生きている状態が大きなエネルギーを持っているとともに死んでいる状態にも逆方向の大きなエネルギーがあるのだとすればその両方の状態を一度に経験することで莫大なエネルギーが得られそうだと考えたのかもしれない。

即身仏のような存在も生命エネルギーを生かそうとしたものと捉えられそうである。

即身仏とは、本来死後にするような修行を生きているうちから行い、生きたまま仏になろうとすることだが、同時に死後の遺体がそのまま仏像のように祈りをささげる対象になっていることも特徴である。

飢饉のときなどに特に多くの即身仏ができているということから考えても、かなり強い祈りの意思をもって即身仏が作られていることが想像できる。生きている状態で仏になることをめざしそれを実施したことそれ自体も普通の人間には困難なことであるという意味でより強力な仏であるというイメージが持てそうなものであるが、それに加えて、生きていた身体をそのまま利用しているという点も、過去の仏をかたどった一般的な仏像よりも生のエネルギーを強く残していそうな即身仏をよりありがたがっていても不思議ではないだろう。

今回のセミナーを通じて生命の持つ力についてここまで述べてきたような点を考えてきた。生命にあふれた山の中を歩き、生と死の合間を体験することによって自身の持つ生命エネルギーを強化する、というのが修験の根本にあるように感じられた。密室で煙に巻かれる南蛮いぶしなどまさしく「やべー死ぬかと思った…」と言わせるためのものなのだろう。人造生命も作ることができない現状、このような生命エネルギーとうまく付き合い利用していくことが必要なのだろう。その意味では現代人にとって生死観を見つめなおしてみるというのは一度必要なのかもしれない。

力強い生

理工学部２年　関野 泰宏

今回のセミナーで考えたことは、自分は周囲との結びによって生かされているということ、そして生命は力強いということである。

都会の喧騒から遠く離れた庄内地方において４日間、自然と向き合いあらためて生と死について考えた。ここでは今回のセミナーを通して自分の中の生命観がどのように変化したのか、どういった影響を受けたのかについて簡単に報告したい。

結びによって生かされているとはどういうことか。ここでいう結びとは、つながりのことであり、二つに分類することができる。一つは過去と未来の結びであり、一つは自己と他者の結びである。自分は普段、ごく普通の学生として生活をしている。朝起きて、まっすぐに大学に通い、同世代の友人達と昼食をとり、夕方になればまっすぐ帰宅する。バイトやサークル活動でも、そこで出会い、話をするのは同年代の若者が中心である。ところが、今回のセミナーではそうではない。様々な年代の方と、直接対話させていただく機会が、そこかしこに散らばっているのだ。この体験は自分にはとても貴重であった。当然、自分の親世代の方とお話もさせていただいた。そこで感じたことがある。人は二つの結びによって、人とつながっているのではないかという実感である。いうまでもなく、人は誰でも親を持つ。親も当然人であるから、親もまた同様に親を持つ。その親もまた、というように、人類を初めとする生命体はすべて、長い歴史の中で延々と生命のバトンを受け渡してきた。その現走者が現代に生きる我々である。当然のことながら、もしどこか一つでもたがが違えば自分は存在していない。先祖がいるから今の自分がいる。このように、人はみな過去と未来との結びを保持している。これを仮に「タテ」の結びだとすれば、もう一つの結びは「ヨコ」の結びということになる。これもまた言うまでもないことだが、人は一人では生きていけない。人はそれぞれ、親や兄弟と言った家族を最小単位とし、学校や会社、地域、国といったさまざまな共同体と生活を共にする。このつながりが「ヨコ」の結びである。これら「タテ」「ヨコ」の結びの存在を改めて考えさせられた。

もう１つ、このセミナーを通して考えたことは、生命の力強さについてである。都会で生活をしていると、せわしない日常の雑多に忙殺されてしまう。そのため、自然の恵みを肌で感じることができる機会というものも限られ、あらゆる体験が既視感の繰り返しとなり、ふと気がつくと生きる意味を見失っている自分に気がついたりしてしまう。自分も、最後に山を登ったのはいつだっただろうか、などと考えながら、山伏修行体験をさせていただいた。人は自然の中で生きている。自然を吸い、自然を食し、自然を飲み、自然を踏みしめ歩き、豊かな生を享受している。ところが、このような豊かな生というものは、常に死と隣り合わせであることを忘れてはならない。滝に打たれると、初めは身も凍えるような寒さに舌を巻くが、次第に体の緊張がほぐれていき、やがてあたかも水と一体化したような、自分が水であり、水が自分であるような奇妙な感覚に襲われることとなる。唐辛子をいぶした煙に包まれると、初めはあまりの息苦しさに涙も止まらなくなるが、次第に呼吸のコツを体得し、やがてずっと昔からその場所にいたかのように適応することができる。これらの経験から、私は人間の生というものの力強さを感じた。それは、自らの生を過酷な状況に追い込み、死というものに近づければ近づけるほど、より強烈に生きる方向へのベクトルに引っ張られるのではないかといった印象だ。 豊かな生活をしているときには気づけなかったが、人間の生命力は本来しなやかで、弾むような躍動感を持つべきものなのかもしれない。押さえつければ自然と反発する。あえて非日常の空間に身を置き、体に負荷をかけることで、自然と明日を生きるエネルギーが湧いてくる。 平和な時代、これといった目標も生き甲斐も見いだせないままぼんやりと生きてきた自分にとって、もっと生きたい、という欲望の存在を自分の内側に見いだせたことは新鮮であるとともに、これからの自分の生き方を考え直す良い契機となった。

今回のセミナーでは、セミナーが始まる前と後でマインドマップを製作した。テーマは「生命」で、そこから連想される言葉を自由に書き込む。始めに書いたマインドマップでは、「感情」「感覚」「変化」といった､抽象的な言葉が並んでいたが､それが後に書いたものでは､「自然」「食」「先祖」など、より具体的になっていた。これは、今回の山伏体験を通し、より生を身近に感じたことに起因するのではないだろうか。4日間という短い期間ではあったが、非常に濃密な体験をさせていただいた。簡単ではあるが最後に、関係者、参加者の皆様に感謝の辞を述べさせていただきたい。本当にありがとうございました。

生命について考える」
～「受け継ぐ」ということ

社会人　中谷 任良

本セミナーにおいて学んだことは「生きていく中で大切なことは『受け継ぐこと』である」ということでした。

『受け継ぐこと』は初日のグループディスカッションで私たちのグループで立てたテーマ「生きることは食べることである」ということ、日ごろ仕事をする中で感じていた「いま私たちが持っている考え・思想に至った発端やプロセスを記録することの重要性」ということにも関連しています。この学びは、何かこれからの自分のものの考え方、生き方の軸になるように感じています。

「生きることは食べること」というテーマは、各自の作ったマインドマップに現れたキーワードを見たところ、食べ物や、農業関連のものが多かったことから、メンバーに共通して「食べること」への関心が強いからではないか…ということが発端となっています。この言葉は中坪さんが提案したものでしたが、それ以前にも、NHK 連続テレビ小説『ゲゲゲの女房』のワンシーンでも出てきた言葉として非常に印象に残っていました（後日、9/30から始まる『ごちそうさん』のテーマであることも知りました）し、私自身も義父に初めてお会いしたときに「食べっぷりの良さ」を気に入られたというエピソードがあり、今回のセミナーで問い続けるテーマとして非常にしっくりくるものでした。

「食べる」ということは、動物が生きるためにエネルギーを摂取するためにとる行為、といえるかと思いますが、言い方を変えれば、他者の生命を体内に取り込む、すなわち生命を『受け継ぐこと』であると言えます。私たちがいまここに在るのは、先祖からの血の継承だけでなく、多くの生命が受け継がれているからなのだと言えます。さらに広げて考えると、自分たちが食べる食糧は、農業や養殖という生命の連鎖を助け続けさせる行為を通じて得ているし、自分たちの口に届く際に楽しくおいしく頂くために、料理や加工といった行為があると言えるので、私たちの日々食べるものには常に『受け継ぐ』ことが常に背景あるのだと思いました。

もう一つ、日ごろの業務の中で感じている『受け継ぐこと』の大切さについて。現在、私の業務は新規事業立ち上げのための仮説検証を行うことです。仮説を立て、検証し、ビジネスの形を作っていくプロセスには、基本的に正解はありません。しかし、私たちが作ったビジネスの形が、どういった経緯や考え方に基づいて成り立っているのかをきちんと説明する必要があります。したがって、そのプロセスや考え方のターニングポイントが何であったかを丁寧に記録していく、すなわち『受け継ぐこと』が大事なのだということを日々感じています。

よく、仕事がうまく進まなくなったり、大きな事故が起こったりする背景に「マニュアル化の弊害」というキーワードが上がってきます。マニュアルそのものは、業務を効率化したり、物事の判断にブレが生じないようにしたりするために作成するものですから、マニュアル化それ自体が悪であるとは思いません。しかし、これが問題を起こすのは、たいていマニュアルの成立から日が経ってしまっている時であるように感じます。察するに、そのマニュアルを利用する人たちに「なぜそのマニュアルが作られたのか」という発端や思想が受け継がれず、ただマニュアル通り運用することだけが受け継がれルーチンになってしまうために、運用する人が思考停止になっているからなのであろうと考えています。もしそのマニュアルが成立するに至った発端や思想が受け継がれていれば、日が経つにつれ変化していく時代にマニュアルが即さなくなったとしても、柔軟にマニュアルの改善が行われるのだと思います。現在の社会では、よく「答えのないことにいかに対処するか」とか、「既成の枠組みをいかに変えていくか」といったことが議論の俎上に上がります。こういった議論をするにあたり、これまで受け継がれてきたことは何だったか、そして未来へは何を受け継いでいくのか、という視点を持つべきなのではないかと感じました。

このようなことから、『受け継ぐこと』の大切さを、自分の行動や思想の軸に取り込むことができたと感じています。

最後にもう一つ、庄内で感じた「受け継ぐこと」のエピソードを。セミナーのあと、鶴岡駅までのタクシーで運転手さんとの会話の中で、私が庄内の食の豊かさに感動した旨を伝えたところ、「このあたりは湯殿の神様に守られていて災害が少ないから」と仰られたことに大変感銘を受けました。その方の素性も詳しく存じませんし、たまたまその人がそのような思想を持っていただけなのかもしれませんが、その話を伺って、おそらく庄内に住まう人の隅々に、出羽三山の山岳信仰や徂徠学の思想が、行き届いているのであろうと感じ、庄内という風土にますます興味を持った次第です。また機会があれば、庄内に訪れて『生命を受け継ぐこと』について考えたいと思いました。

「生命」を考える

文学部４年　中坪 千賀子

私は今まで20年と少しを生きてきた中で、近しい人の死に直面したことがない。人の死というものに関わる機会がなく、人はいずれ死ぬということを頭では分かっていたが、死というものを自分の生に直結したものとして捉えたことがなかった。死について深く考えず、生についても深く考えず日々を過ごしてきた。

そのような中で庄内セミナーに参加したことは、私にとって生と死をはじめて真剣に捉える良いきっかけになったと思っている。

事前課題として庄内を舞台にした映画『おくりびと』をみた。葬式というものをまともに体験したことがない私にとってこの映画は隅々まで新鮮な驚きに満ちていた。ふつう人が死ぬと、まわりの人々は葬式をあげる。故人を弔う儀式をすることによって死者と生者の時間を区切り、人の死を受け入れる。そして自分が生きていることを確認しながら普段の生活に戻っていく。

葬式という儀式はよくできたシステムだと思う。主役である故人のためのものではなく、今を生きてゆかなければならない遺族のための儀式である。生と死をはっきり分けて、悼む心を慰め、遺族が現在を生きていくための区切りとなる非日常を提供する。

即身仏には葬式をあげていないと聞いた。注連寺のお坊さんは、「即身仏になられた方には葬式をあげていません。その意味ではまだ生きていると言えます。」とお話して下さった。即身仏は生物としては完全に生命活動は行われていない。しかし、生きているとされる。

私は、ここに「儀式としての死」の存在を強く感じた。即身仏の場合、医学的に見れば既に死んでいる。しかし、儀式としての死を迎えていないのだ。この場合の儀式の主役は即身仏、儀式の対象としてその死を受け止めることになるのは即身仏を拝観する私たちとなるはずである。即身仏の死の儀式は執り行われてはいないことによって、儀式の効果とは逆の効果を及ぼしている。即身仏は儀式を行わずに存在し続けることで、私たちの中の生と死の境を取り払う。

私はセミナーを通して死には2種類あると考えるようになった。生物としての科学的な死と、残された人々にとっての儀式を通して認識される死である。儀式としての死については、儀式の主役である死者は直接関与できない。儀式を執り行う側＝儀式の対象者によって規定される死である。

セミナー参加前は、生物学的な死が圧倒的であると考えていた。しかし、様々な死生観に触れ、自らも生と死を深く考えていく中で、儀式としての死の比重が高まっていった。

このセミナーのハイライトは何と言っても修験体験である。2日目の講義のなかで、修験道の本質は即身成仏であると教わった。苦行ともとれる修行を通して自然と一体になり、真理である大日如来と同化するために擬死体験を行うのである。この修行を通した擬死体験は、儀式としての死の主役と対象者の両方を自ら体験することだと考える。

修行という儀式を通して一旦死んだことになる。実際に体験でも、滝に打たれ、山中を歩き回り、煙で燻されて死ぬほどの思いをした。そして、よみがえる。

修験道の修行とは大掛かりな自分の葬式のようなものではないだろうか。山に入り非日常の環境に自らを置き、修行の中で生と死の垣根を取り払う。山から降りて生と死を分ける。

儀式としての死は、生と死を明確に分けるものであるが、その中での死は厳然とした動かしようのない事実ではない。即身仏が生きているように、死の範囲はある程度柔軟なものである。生もその範囲を変動させられる。生と死をどのように認識し、どこで分けるかは儀式に参加した個人に委ねられる。

科学的生死の区別の他にも、このような新たな死生観が私の中に生まれたのは庄内セミナーでの大きな収穫だと思う。

また庄内セミナーでは、どのように生きるかということも大いに考えさせられた。徂徠学のあり方や酒井家のあり方を通して、庄内の人々が何を考え、どのように生きてきたかの一端が垣間見えた。先人の生き方に照らして自分の生きる道を改めて考えることとなった。

様々な背景を持つセミナー参加者と対話できたことも良い刺激になったと思う。社会人、学生、理系、文系、初対面の人と言葉を交わし合い、楽しい時間が過ごせた。セミナーで行ったマインドマップ作成が一番興味深かったように思う。同じ「生命」という言葉から出発しても、その人の所属、関心、状況によって全く異なる連想が展開された。他人のマインドマップを見ることは自分の知らない世界を見るようで面白く感じた。

日常生活の中で他人というものをこれほど意識したことはなかったように思う。初対面同士が大半の合宿という特異な状況で強く自分とは異なる存在を感じた。

生命とは何かと考える際に意識するのは、自己の中での死との対比、そして他者の生命との対比なのではないだろうか。死が意外と身近なものだからこそ、他者と衝突するからこそ、自分の生命を強く感じられる。生命とは死や他者など様々なものから区別され、対比されることで輝くものであるとともに、それらと相互に密接な関係を保っているものであると感じることができた。

煩悩の使い道

文学部３年　三木 瑶子

死はすぐ隣にいる。今回のセミナーを通して強く感じたことだ。ミニ山伏体験は白装束を着て一度現在の自分は死に、修行を通して新しい自分に生まれかわるというものだ。物理的には生きているはずなのに、死んで生まれ変わるという行為は極めて特異である。しかし、昔の人はそのような修行を通して死を身近に感じていた。そうして身近なものとして考えることによって死に恐怖をあまり感じなかったのだろうか。いや、むしろ死の恐怖から逃れるために死を身近なものとして考えようとしたのだろう。昔の人はそうするしか無かったのだ。医療技術が発達していなかったからである。そのため、延命することはできず現世を変えるよりは来世に託そうとした。人間は生まれ変わることを宗教の中では「輪廻転生」という考え方で表したが、命を大切にするということは「来世のために現世で良い行いをする」ということだった。

しかし、庄内セミナーで修験道に挑戦した私たちは、死を身近に感じることはできたものの、「輪廻転生」の考えが根付いた訳ではなかったように思う。むしろ、もっと“今ある”生命を大切にして現世を生きていこうという思いが強くなった。それはもちろん医療技術が発達し昔と比べて宗教に頼らなくなったからであり、そのため「輪廻転生」を深く信じていないからだ。では、今ある命を大切にするとはどういうことだろうか。

命を大切にするということは具体的に二つの考え方がある。一つ目は身体を大事にするということだ。生活習慣に気を付ける、自殺をしないといったところだ。命というのは生きているということだから、その命が宿る身体を大切にするのは当たり前のことだ。

二つ目は命を有意義に使うということ、つまり人生を有意義に過ごすということだ。人生を有意義に過ごすということ、それには煩悩が関係してくる。

修験道は煩悩を捨て去る修行だった。煩悩とはあらゆる欲なわけだが、結論からいうとそれを捨て去ることはできなかった。修行中忘れることがあっても、滝に打たれたり煙にいぶされたりしている最中などの死に直面しているときだけであって、私たち自分の力のみで意識的になくすことは不可能なのだと思い知らされた。だからこそ、煩悩をなくすと考えるのではなく煩悩と上手く付き合っていくことが大切なのだと私なりに考えた。ある意味、煩悩とは天から与えられたものであり、消し去るほどの必要はないかもしれない。

煩悩と仲良くやっていくために、煩悩を抹消しようとするのではなく、煩悩を他者のために使えばいいのではないかと思った。例えば、「食欲」という煩悩がある。煩悩の定義が、「身心を乱し悩ませ智慧を妨げる心の働き（汚れ）」なのであれば、高級焼き肉店で上カルビを食べることは煩悩だ。しかし、貧しい国の子どもたちにパンを与えることは煩悩とは言うべきではない。子供たちに煩悩を勧めているとは言い難い。また、お笑いコンビを組んで有名になって人々を楽しませたいと考えることは煩悩にみえるかもしれないが、そのコンビのネタによってすごく悩んでいた人が元気になることもある。そう考えると煩悩とは必ずしも悪いものではなく、他者を幸せにするものだ。煩悩を捨てるのではなく、他者の幸せへと結びつけることで、人生をより有意義に生きることが出来る。

庄内セミナーを通して、死が身近なものになったのと同時に、生は、よりなまなましく儚いものだということを感じた。もし明日死ぬとしたら何をするか、そんなことをふと想像してみると、豪奢な食事がしたいわけではない。ブランド物の洋服を身につけたいわけでもない。ただ今までお世話になった人や暫く会っていない旧友にもう一度会って感謝の言葉を伝えて昔話を楽しんで一日を過ごしたいと思った。実際に末期がん患者に同じ質問をしてみると「いつもと変わらない日常が送りたい」と答えるそうだ。生と死を見つめなおしたとき、煩悩という汚れなど私たちの目には映らない。煩悩に振り回されず時々、いつもの日々は当たり前ではないということを思い返すことができれば人生は素晴らしいものに思える。来世のために煩悩を捨てるというのであれば、現世のために煩悩を操るのも一つの考えだ。時代によって価値観は変化する。時代によって煩悩と上手く付き合っていけたら素敵だ。

「生命」を考える

経済学部４年　宮杉 隼人

人間は何故生きているのだろうか。仕事や悩み事に日々追われ、少ない貯金に縛られ、行きたい場所へも行けず、空いたわずかな時間でご飯を食べる。生きるために。何故だろうか。経済学的に考えるならば、生きることによるメリットが生を終わらせることのデメリット・コストを上回るのだろう。では、生きていることのコストとはなんだろうか。莫大なお金、時折感じる心理的ストレス、などであろうか。このコストはなかなか大きいものである。少なくとも我々は、近所のラーメン屋にいくくらいのメリットではこんなコストは支払わない。生きていくことに壮大なメリットを見込んでいなければこんなコストはとてもでないが払っていられない。それでは生きることの期待利得とはなんだろうか。友達と小さなバーで語り合う喜び、何かを成し遂げたときの達成感。こちらもあげればキリがない。人生の期待利得とはそう簡単に計算できないのだ。コツコツ積み上げてきた努力がふとした瞬間に報われることもあれば、反対に水の泡になることもある。そう考えると、人が何故生きているかを経済学的に分析することがいかに愚かなことかわかる。人は損だから死ぬ、得だから生きるという程単純なものでもないのだ。

話を元に戻すが、人は何故生きているのだろうか。1つに死ぬことへの恐怖があるだろう。人は未知なるものに対しては強い恐怖心を抱くのが普通である。だからこそ、様々な手段をもって情報収集にあたるのである。期末試験の前に過去問を必死になって集めるのと同じことである、経験・過去の分析こそが、その恐怖心を和らげる手段なのだ。それでは死　はどうであろうか。誰も経験していない、予測できないだからこそ、依然として完全な未知としてその概念が存在しているはずだ（死者と対話できる人を除いて）。高度な情報化社会となった今、完全なる未知　というものはもうほとんど存在していないのではないだろうか。

臨死体験とは、その死への恐怖を和らげるのに有効かもしれない。なんせ死を疑似的にでも体験できるのだから。山伏修行とはまさに臨死体験だ。自ら、熱を捨て、空気を捨て、食を捨てる。生きるのに必要な要素を限界まで削っていく。こうすることで、死は特別なことではないという境地まで達するのだろう。それでは、死への恐怖も克服した人は、何故生きるのだろうか。

こうして見ると人は生まれながらに生きることを宿命づけられている気がする。自我を持った時から、人は死に向かって歩み続けているのと同時に生を堪能しているのだ。とまあ自分なりに考えてみたが、こんな事を続けて考えていると頭がおかしくなりそうだ。そんなむず痒い気持ちを堪え今しばらく思考を続けてみよう。

生きるというのは半ば避けがたいことである。人は持って生まれた寿命を全うすることをよしとせねばならない。そうとすれば、せっかくの人生である。時間もお金も体力も、持ちうる全てのリソースを使って満足いく人生を送りたいと思うのが当然だろう。どうすれば満足するかは人の価値観次第である。世界一お金持ちになりたい人、世界一物知りになりたい人、世界一友達の多い人になりたい人、いろんな人がいるだろう。何百億という人間がいたら、その目標によっていくつかのカテゴリーに分けられる。もちろん全員が全員、目標を達成できるわけではない。世界は全人類の欲望を満たし尽くせるほどまでには大きくないのだ。つまりその中で勝ち抜いたものだけが、至高の満足感を手に入れるのだろう。世の中競争である。さて、話をミクロにしてみよう。今回庄内セミナーに参加した方のほとんどが慶應生、ならびに慶應OBである。私も含め、彼らはこれまでいくつもの競争を勝ち抜いてきたに違いない。なんらかの目標・理由があって。

功績、結果を積み上げていき、幸せを手に入れる。そしてそれが自分の家族や周りまでも及ぶよう更に努力する。その連鎖を繰り返していき、いつかは死ぬ。その規模が大きいか小さいかであって、やっていること・目指していることはビルゲイツも我々もあまり変わらない、と思う。しかしそんなことも、何十億、何百億年と続いている地球から見たら何でもないことであるし、さらに広く、宇宙から見たらそんな事実は存在していないに等しい。さて、それでは人間は何故生きているのだろうか？

修験道の心について

文学部２年　茂田 雄哉

1、山伏修行体験について

この庄内セミナーの３日目のセッションは、山伏修行体験であった。目的は「修行を通じて自然と一体化し、以前の自分から生まれ変わる」ことである。白装束をまとって、滝打ちを始め、座禅、南蛮いぶし（唐辛子の煙の立ち込める部屋で座禅）、火渡りといった修行を行うというものだ。いずれも素人である私には厳しく、途中で抜けたくなることは何度もあった。修行を行ったのは９月初旬だが、その日は曇りで気温がやや低く、滝打ちの水は冷たく感じたし、南蛮いぶしではくすぶる煙が息苦しく、喉が痛くなった上、目にしみて涙が出てもいる。

じっと水を浴びたり、動かずに座ったりしていると、生じてくる雑念に嫌でも対処することになった。滝打ちの水は冷たいが、それで早く終わらないかと思っていると、なおさら冷たさが身にしみてくる。南蛮いぶしでも、煙のにおいや部屋の白くかすんだ様子に怯えていると、余計に息が苦しくなる。嫌でも精神を集中しなければ耐えていられない環境に身を置くことにより、日常のあらゆる雑念にどう対処するか考えることにつながったと思う。

しかし、雑念自体を消すことはかなわない。羽黒では、修行から帰ってみれば以前と変わらない自分に気づいた、という旨の古歌がある。その通り、いくら修行を行っても、感情を完全にコントロールすることはできない。

修行体験の目的は自然と一体化することであった。昔から伝わる本格的な修験道も、趣旨は同じだ。このことは、セミナーでは雑念や、より難しい言葉を用いれば煩悩は生じてきて当たり前であり、それを受け入れることが大切だという話があったように思う。感情も自然のものなのだから、思い通りにならないからと焦る必要はないということだろう。日常の生活を営んでいると、怒りや嫉妬といった、あまり好ましくない気持ちが込み上げることがままある。この山伏修行体験を通じて、私は物事への集中を邪魔する雑念と戦うと同時に、より自分をあるがままに受け入れようと思うようになった。

2、即身仏修行について

この庄内セミナーにおいて、私は初めて即身仏を知り、実際に見た。即身仏とは、おおまかには修行者が五穀、十穀を断つなどして自身の体から水分、脂肪を抜いたのち、生きたまま土の中に入り、その後ミイラのようになった遺体が掘り出されて仏として祭られるものである。過程は何千日にもおよぶという、肉体的には死がもたらされる上に長期的に苦痛にさらされ続ける修行である。土に埋められる時には立ち上がることすらままならないという。土の中の遺体は後に掘り出されて祭られることになるのだが、祭られるのに十分なほど状態がいい即身仏の割合もそう多くはない。修験道の中では、最も厳しいといわれる修行だ。

セミナーの過程で訪れた湯殿山・注連寺にある即身仏は、名を鉄門海上人という。即身仏になるために肉体的に死を伴う修行を行っただけでなく、生前は眼病が流行していた江戸で自身の左目をくりぬき、隅田川に捧げるなど、各地で祈祷を行い、名を知られた僧である。法衣を身にまとい、肌が黒ずんだ即身仏の姿は生前の飢えと死後の遺体の乾燥のためか小さく、特に手は赤子程度の大きさだった。しかしその姿を見ていると、苦痛の多い修行を耐え抜いた雰囲気が濃厚に漂ってきて、自然に手を合わせたくなる。

鉄門海上人らがこうした即身仏修行を行った動機は、単に自身の罪や穢れを払うことだけではない。人々の幸福を願い、飢饉や厄病といった災害が起きないよう、祈祷を引き受けたのである。つまり利他的な理由、人々に貢献するためであった。こうした行為は、科学的に天災に対しては何の効果はない。飢えと戦いながら修行し、最終的に身を土に埋めて肉体的な死を迎えたところで、雨量が増えるわけではないし、疫病もなくなることはない。現代の我々の目から見れば、即身仏になろうとする者たちの行いは驚きと同時に、滑稽に思われることもあるだろう。即身仏のみならず、鉄門海上人が自分の左目をくりぬき、隅田川に捧げたことも、それで眼病が収まったとするならば現在では怪しい話でしかない。目をくりぬくことと、眼病の流行が止むこととは、科学的には関係はないからである。あるとすれば、修行僧が川に目を捧げ、祈祷したという話で民衆が安心し、その心理的な効果で眼病にかからなくなることくらいだろうか。このように、即身仏を含めた当時の修行僧の行いは、無駄として見受けられかねない。

しかし当時の人々の自然観、宗教観を考えてみると、滑稽な行いとひとくくりにすることはできない。当時の人々は、自然を思い通りに操ることはほぼ不可能だった。現在でも同じかもしれないが、好きな時に雨を降らせることはできないし、厄病が発生すれば防ぐ術もない。災害が発生すれば、簡単に人の命が奪われる。

日本のかつての宗教観はアミニズムを呼ばれ、山や川、草木の１本に至るまで神が宿るとされていた。それらは容易に人の手でコントロールすることはできない。そうした神の怒りに触れないよう、人々は自然（山や川など）に畏怖し、傲慢な行いを謹んできたのだ。信仰にすがる心情は理解できな

くはない。

即身仏修行は、前述の通りそうした人々の祈祷を引き受けるものである。当時の宗教観に加え、修行の厳しさを思うと、即身仏を行った者たちの義務感を侮ることはできなくなる。繰り返しになるが、即身仏の修行は長期に渡るものだ。何年もの間、飢えと戦わなければならない。最終的には、暗い土の中で孤独に耐えながら弱り果てることになる。信仰心の高さがなければ、こうした行いはできないし、強い精神力、人々の幸福を願う心があってこそ、可能となるのだろう。鉄門海上人を始めとして、即身仏になろうとした者たちの精神は尊敬できる。

自分自身の心も、自然も思い通りに操ることはできない。科学の発展で自然のほうはある程度操れるようになったが、まだ完全とは程遠い。そうしたどうにもならないものをどう受け入れ、共存していくか、今回のセミナーは考えるきっかけとなった。

生死と自我

経済学部２年　守谷祐樹

人は誰しも生きるとは何なのだろうだとか人生の意味を考えるなど生と向き合う機会を持つ。しかし生とは何かと考えるときに死を切り離すことはできない。何故なら生の終着点は死であり、誰もが生まれた瞬間から死に向かっているからだ。したがって生とどう向き合うのかという問題は死とどう向き合うのかという問題に直結する。

では人はなぜ生や死と向き合うことになるのであろうか。それは死が決して逃れることのできない運命ということを悟るからだろう。そして人間は死を恐れる。人間は恐怖に晒されることを嫌い、恐怖の対象である死に対して無意識のうちに向き合わざるを得ない。死が怖いということの根源は死が未知のものであり、全く見当がつかないものであるということだ。人が恐怖を感じるのはその事柄に対抗できる力を持ち合わせていないと理解したときである。人間は死の経験がないから恐怖を感じるということだ。死と向きあうのは人間だけが自我を持っているからに他ならない。自我を持たない生物は死と向き合うということはないだろう。もちろん、動物も死を本能的に恐れてはいるだろうが死とは一体何だろうかと考えることはないだろう。よってここでいう人間の死とは一個の生命体の命が消滅することではなく、人間の自我が消滅することを指す。したがって死と向き合うというのはこの自我とは何なのか、自我として生きるとはどういうことなのかということを見出すことに他ならない。自我というのは頭の中に存在しているだけで、実際に生きているわけではない。自我というものは確かなものではなく曖昧な存在だからこそ人は自我の不安定さを恐れ、自分とは何なのか考えている。人にとって曖昧な自我というだけで不安なのに、その消滅など全く想像もつかない恐怖でしかないのだ。

死と向き合うこととは自我とは何なのか考えることに繋がると上述したが、人はどのようにして自分について考えるのだろうか。それは自分を作り上げているものに目を向けることで可能となる。人は自分一人だけで自分を形成しているわけではない。自分以外のものと相互に影響を与えながら生きている。それは家族や友人や恋人であったり、所属している共同体であったり、街中の見ず知らずの他人であったりする。またそれは人だけではなく社会や環境などモノや概念であったりもする。自分以外のものを自分との繋がりと定義するならば、繋がりには横と縦の繋がりがある。これは所謂、人間関係における縦と横の繋がりを指すのではなく、時間軸における縦と横の繋がりを指している。横の繋がりとは「現在」の人と人との繋がりのみならず社会環境や自然環境のことである。縦の繋がりとは「現在」以外の時間、つまり過去と未来における繋がりのことであり、子孫や先祖といった繋がりや過去や未来時点における環境を指す。こういった繋がりの中で人の自我が形成されているのであるから、繋がりの中から自分について考え、そして自我の消滅になにか意味を見出すのだ。

死による自我の消滅を認めてしまうと死ねば全てが無意味になってしまう。そうすると結局、死んで全てが無になるために人は生きていることになる。ゆえに生きることの全てが無意味であるという虚無感を感じてしまう。しかし、死によって自我が消滅しても何らかの形で自我が継続するという意味を付与できれば生は無意味ではなくなる。自我を延長させる方法は２つある。一つは死後の世界があるものと考え、死んでも自我を継続させることができると考えることである。例えば、即身成仏は生前に厳しい修行を積むことで現世の肉体のまま仏になるという信仰であるが、これは死後に仏になるという形で自我を継続させることができるのだ。もう一つは

何か不滅なものに自分を投影し同化させることである。死ねば消滅してしまう私の自我だけが存在の全てではないというように考えて自我の消滅によって自分の存在が無意味になるという風には考えなくなる。例えば、芸術家が後生に残る作品を残すという形で自我を継続させることが挙げられる。子孫繁栄もこれに当てはまる。子供という存在を残すことで自我の意識を延長することが可能となる。

このように死の意味を見出すことで生の価値を理解することができる。つまり、死について考えることが生について考えることに繋がるのである。お盆や法事や身近な人の死がきっかけかもしれないし、お墓参りや子供ができた時がきっかけかもしれないが、様々な繋がりの中で生かされていることを理解することで生や死についての認識が深まるに違いない。死を意識するからこそ生の充実がはかれるし、繋がりの大切さを理解し自我とは何なのか考える機会になる。

「生命」を考える

社会人　山崎 秀明

私が庄内セミナーに参加した理由は二つあった。一つは、普段からじっくり時間を取り生命に関して考えたいと思っていたからである。私は看護師として、救命救急センターという生死の境に直面する日々の仕事の中で、本来、生命に関してしっかり考えなければならない立場にある。しかし、日々の業務に追われ、生命に関してじっくり向き合い、考える時間が取れていないというジレンマがあった。もう一つの理由は、生命について多種多様な背景を持つ方々と意見交換をし、考えを深めたいと考えたからである。普段、私は意見交換をする場合、医療職者という限られた中での話し合いとなってしまう。しかし、実際関わり、ケアの対象となるのは医療職者ではない、患者やその家族である。一般の方々が生命に関してどのような考えを持っているか理解することにより、日々のケアに生かしたいと思っていた。

上記の理由で、参加した庄内セミナーであったが、参加前の期待とは違った形で多くの学びが得られた。大きく二つの学びを得ることができた。一つは実体験をすることにより、体験前と考えていたものとは、違う考えを持つようになったことである。もう一つは、生命について意見交換することにより、今までとは別の視点から生命について考えることができたことである。

一つ目の実体験については、修験体験の滝打ちの行が私に大きな影響を与えた。私の短い人生ではあるが、この年になると、未体験の事でも想像がつくものの大半は想像の範囲内の実体験となる。滝打ちの行も私は未体験であったが、そんな想像できる未体験のもののひとつであった。しかし、実際に滝に打たれるとその印象は全く異なるものであった。私は激しい流れの滝と、緩やかな流れの滝の両方を体験した。激しい流れの滝では、想像以上に上からの圧力が強く、その場にとどまり、立っているのがやっとの状態であり、また、冷たく、呼吸も行いづらく、苦しく口からの過呼吸となり、まさに苦しみから死を意識した体験であった。事前に、滝打ちの行は滝に打たれ、滝に負けないように、その場にしっかり立ってなければいけなく、そのことに集中することにより精神統一できると教わったがそれどころではなかった。今回の体験で、私は普段の仕事柄、他人の死に直面することが多いが、生死について考える際も、無意識に客観的な第三者の立場で考えていたことに気が付いた。また、救命救急センターでは、入院時から意識のない患者が多く、死に対するケアの対象の多くはその家族となることが多い。そのため、医療職者として恥ずかしいことであるが、今までを振り返ると自分自身の死について考えたことは今まであまりなかったように思える。患者に対しても、生きている間は治療に専念していて、死に向かうとはどういうことか、患者の視点で考えることはほとんどなかったように思える。もちろん、患者が死に向かうとはどういうことか学んだり、学習することは多かった。しかし、患者に対して今までしていたことは、こういうものだと抽象的な言葉で決めつけ、知識を増やすことであり「考える」ということをしていなかったことに気が付いた。死に向かう人は「不安」であったり「恐怖」であったりするという抽象的な言葉で習い、そしてその「不安」や「恐怖」は人それぞれ違うと教わる。今まではそこで納得して先に進

もうとせず、その「不安」や「恐怖」について考えることはしてこなかった。しかし、今回滝打ちの行で自らが死を意識した体験を得ることにより、これからは患者自身の恐怖に関しても共感し、患者と関わる際は意識して関わっていけるのではないかと思った。今回の滝打ちでの苦しみは自ら進んで行っていることであり、滝から出てしまえば、その苦しみから逃れることができた。しかし、あの場から逃れることができないかと思うと、死を意識した患者の苦しみは計り知れないと思った。一方で、緩やかな滝に打たれた際は全く別の印象を受けた。滝に打たれているときは特別なことは感じるということはなかった。事前に頭から滝が流れ、水と一体になる感覚を目指すように言われたがその感覚も分からなかった。しかし、目を閉じて精神統一する時間がしばらくあり、その後目を開けたとき、精神統一する前と後では全く違った景色が見え、後の方が心が晴れやかになり、景色がより綺麗に見えるようになったことには、自分の想像外の事であり驚いた。

もう一つの学びである意見交換については、セミナー参加前に期待していた「今まで考えてきた生命観を深める」ということはあまりできなかったように思える。しかし、今まで出会うことのなかった新たな視点を知ることができ生命観広めることができた。普段のケアの対象である患者やその家族という医療者ではない一般の方々が、死についてどのように考えているのか知ることができたのは新たな視点となった。私たち医療者は生命観について、時間をかけ考え、話し合うため、具体的なこともある。そのため、私がこの考えをさらに深めようと今回セミナーに参加した。しかし、実際にセミナーの話し合いで気づいたことは、今まで医療者間で死や生命観に関して話し合うことが多かったが、それらはすべて自分以外の人の死に関することであったと気づいた。私たち医療者は死に対して「死に直面した患者やその家族、担当の患者を失った同僚や自分自身」とケアの対象として共感したり、話し合ったりするが、自分以外の人の死に対して考えることが多いということである。実際、一般の方々は、死を自らのことと考え、それは現実味のないことであり、死を抽象的にとらえていることが分かった。実際、一般の方々のマインドマップを見ても、抽象的な大きな言葉に広がっているように感じた。逆に私は抽象的な言葉は思いつかず、大きな言葉に広げることはできなかった。今回の話し合いで、普段ケアの対象としている患者やその家族がどのような生命観をもち、死を認識しているかわかり、大きな学びとなった。今まではケアの対象につい具体的に知る場面がほとんどなかったので、今回の発見や学びを日々のケアに生かして、患者やその家族に関わっていきたい。

「生命」を考える

商学部１年　山崎 梨子

私が今回の庄内セミナーを通じて改めて実感したのは「つながり」だった。この「つながり」は、人と人とのつながりに限らず、自然と人、食べ物と人、すべての、あらゆるものとのつながりのことだ。そして、自分はそれらとの関わり合いの中で生かされている存在であると感じた。そして、生命も「つながり」であるのではないかと考えた。このような考えにいたった、庄内セミナーでの体験を三つ紹介したいと思う。

一つ目はセミナー初日と最終日に行ったマインドマップの作成だ。マインドマップとは、一つのキーワードを中心とし、そこから放射状にイメージを広げ、他のキーワードでつなげていくものだ。セミナーでは、「生命」を中心としたマインドマップを作った。セミナー初日、グループのメンバー同士で各々のマインドマップを見比べ、お互いの意見を出し合った。私はまず、同じ「生命」という単語から枝分かれしていくそれぞれのキーワードの違いに驚いた。こんなにも個人差がでるものなのかと。それは、各々のその単語との関わり合い、これまでの経験からくる違いであった。そしてもう一つ感じたことは、すべての言葉は「生命」と結びつくということだった。例えば、人が魚を食べるように、ある生き物が死をむかえても、その死は別の生命を支えている。生命とはすべてのものの始まりであり、また、終わりあるものの次なる始まりでもあるのだ。そしてセミナー最終日、再び「生命」から始まるマインドマップを作成し、グループワークを行った。そこではグループのなかで、共通の言葉を初日より多くみつけることができた。これは私達がセミナーでの４日間をともに過ごし、同じ体験をしたことによるのではないかと考えた。そして、二回によるマインドマップ作成を通して、「生命」とは万物の源であると同時に、つながりの役割もするのではないかと思った。

二つ目はセミナー三日目に行われた山伏体験だ。白装束を着て山を歩き、滝に打たれ、座禅を組み、南蛮燻をするという、どれもつらい修行であった。私は、どうして昔の人々がこのような修行を自ら率先してやったのだろうと不思議に思っていた。しかし、実際に自らこの修行を体験すると、自然のエネルギーを体全体で感じることができ、自分の生命はこれらによって生かされているのだなと感じることができた。大自然と自分とのつながりを、身をもって感じた。だから、私がセミナーの始めと終わりでマインドマップが変化したように、昔の人々も、山岳に登拝することで、自然と一体化し、即身成仏を遂げることはもちろんのこと、修行を通して自分自身を変えることを望んだのではないかと思う。

三つ目は、湯殿山注連寺での即身仏だった。注連寺には鉄門海上人の即身仏が納められている。鉄門海上人は一世行人であり、北海道から四国まで全国に足跡を残している。私は初め、即身仏とは結局はミイラと同じだろうと思っていた。しかし、即身仏とは、苦行を行うことで自らの罪や穢れを除き、永遠の生命と肉体を得ることにより未来永劫、飢餓や悪病に苦しむ衆生の難儀を代行して救済するため自らの身を捧げることだと注連寺で学んだ。つまり、自然が作るミイラ、死者への尊敬の念がこめられて作られるミイラとは違い、鉄門海上人は自らの意思、力で即身仏となったのだ。そのためか、即身仏を見ていると、すでに死んでいるはずなのに、すごいエネルギーを感じた。まさに、生と死の両方を体現したものであった。

私が今回、庄内セミナーに参加しようと思った理由は、セミナーのテーマであった「庄内の生命～あらためて生と死を考える」ということに、格別に興味があったわけではありませんでした。ただ、時間のある夏休みを有意義に過ごしたい、という軽い気持ちで、なんとなく参加することを決めました。そのため、本当に自分などが参加してよいのか、他の参加者の方々やセミナーで扱われる内容についていけるのかと、とても不安に思っていました。しかし、実際にセミナーが始まると、そのよう不安が全く必要なかったことがわかりました。セミナーの四日間はとても充実していて、私が今回のセミナーで得たものは想像以上に大きかったです。

私は庄内セミナーでの講演会、体験、見学により、自然などの万物とのつながりを感じ、庄内セミナーで出会ったみなさんとの関わり合いから、他者とのつながりを感じることができました。自分の生命は自分のまわりによって生かされているのだと。

私は今回初めて鶴岡に訪れました。そこで思ったことは、セミナーの「生と死について改めて考える」というテーマにむいているのは庄内地方以外に考えられないということです。庄内地方の風土、文化、信仰は、普段の生活では「生命」について深く考える機会がない私にとって、とても心地のよいものでした。私にとって今回の庄内セミナーに参加できたことは、かけがえのない経験です。このような経験を私に提供してくださったスタッフの方々、セミナーでお世話になった参加者の皆様、本当にありがとうございました。

「生命」を考える

文学部４年　山本 恵美

庄内セミナーを終え、私なりの「生命観」について述べたいと思う。私にとっての生命は２つの側面を持っている。これは、庄内セミナーを経て考えたことであり、以前とは考えが大きく異なっている。セミナーを経て私にとっての生命とは (1)「まわること」(2)「ひきつぐこと」だ。

(1)「まわること」

ここでいうまわる、とは生命が循環していることを表す。一口にまわるといっても、そこには２つの視点が存在する。まずはじめに物理的な循環、そして次に精神的な循環がある。物理的な循環に関しては食物連鎖等、生物の生活中不可欠に起こる循環がある。世界はほぼ弱肉強食の形で、何万年もその流れを継承して、循環し続けている。これはどんな宗教的な事由があろうと、いつどんなときも行われる普遍的な循環の形である。また、物理的に違う形で生命が循環することもある。たとえば、先端生命科学研究所ではクモの糸を使ったドレスができていたが、もちろんクモの糸は初めから衣服用に作製されるためのものではない。本来生を授かった形ではない別の形で生命を循環させていくということもあるのだ。

では次に精神的な循環について述べていきたい。精神的に「まわること」には仏教でいうところの輪廻転生の考え方が関係している。輪廻転生というと、セミナーの中でも出てきた３月 11 日生まれの子供の話を思い出す。生と死とはセットであり、生があるから死があるのであり、生と死は繰り返されるということである。生命観を語るとき、輪廻転生の考え方が出てくることが多いが、輪廻転生以外にも日常的に生まれ変わることができると考える。もっともこの身近な精神的循環というのはこのセミナーの山伏体験や講義によって得られた考え方である。この身近な精神的循環は、日本と西洋世界とでは異なった考え方に基づいて行われると考える。

日本の山伏体験では、山にこもること、「荒ぶる自然」の中に入り、一体化しようとすることで「生まれ変わ」ることができるとされている。また、神が宿っている自然のものに畏怖の念を感じ、それを感じてできるだけ一体化してパワーを得ようとする。この生命観は日本人特有のものかもしれないが、自然にふれること、自然を通して大いなる神にふれることによって精神的な生まれ変わりを感じることができるという考え方は古くから日本に根付いている。

またたとえ山伏体験をしなくとも、もっと日常的にしかも無意識的に精神的な生まれ変わりを行っていることもあると考える。私たちは、忙しい毎日の中、自然にふれたくなったり、パワースポットとよばれる神社に行こうとする傾向がある。パワースポットという１テーマでも沢山の本やテレビ番組が放送されている。そんな情報が日本社会に需要があるのは、私達が無意識にパワーを取り込み、精神的に新しくなりたいという気持ちがあるからではないかと考える。生まれ変わりと聞くと大層宗教的な香りがするが、実は私達日本人にとって生まれ変わりとは非常に身近なのではないかと考える。一方、西洋世界、特にキリスト教の世界でも違う形で「生まれ変わり」を実感する瞬間がある。通常、キリストの生誕日であるクリスマスの前や、キリストの復活を祝う復活祭の前には、自分の今までの罪を司祭に告白するという風習がある。自分の罪を告白する理由は、今までの自分の中にある悪を全てはきだし、自分を真っ白な新しい自分にして神聖な日を迎えるためである。日本とキリスト教世界とでは、神を見出す対象が多少異なっているが、精神的な循環をすることで神とつながり、さらに生命を強めることができるという考え方は共通である。

(2) ひきつぐこと

私は生命とは「ひきつぐこと」でもあると考える。

私は、初日の生命についてのマインドマップで輸血、移植というワードを使った。これは大好きな友人が病気で移植の話をしており、生命とは時に他の人の一部分をもらって、生命の一部をひきついで成立していることなのだと感じたからだ。体の一部ではあるが、移植や輸血は確実に他人の生命の一部を引き継いでいる。また、同時に自分が何かものを食べるとき、私はそのものの生命をひきついで生きているのだということも考えた。私ははじめて自分でお魚をさばいたことのことが忘れられず、この魚の生命を殺して私は生きているのか！と衝撃を受けたことを思い出した。輸血、移植、魚を頂くことすべてに共通しているのは、「何かを犠牲にして生命をひきついでいる」ということである。普段はなにげなく口にするご飯もお野菜、お肉、お魚も多大な生命の犠牲があってからこそ食卓に並ぶのである。この初日に考えた生命の考え方が、このセミナーを通してさらに深くなった。特に、即身仏について学んだ際に生命とは「ひきつぐこと」なのだと強く思った。私はセミナーに参加するまで即身仏がなぜあんなにきつい修行を自分で課して仏となるのか全く理解できなかった。もちろん今も理解できているとは到底言えないけれど、注連寺で伺った即身仏になる理由の話が私にはとても衝撃的だった。理由の１つの中に「即身仏に願いをかけたら叶う」ため、他人を助けることができるから、自分が出た村への恩返しができるからというのがあった。ここから、生命と

は他人を助けること、他者に還元することともいうことができる。これを経て生命とは物理的にも精神的にも「生命をひきつぐこと」なのだと感じた。何かの犠牲から生命を引き継ぎ、それを他者に還元して生命をひきつぎ、そして (1) のように循環していくことで生命というものは成立しているのだと感じた。

生と死がこんなにも近いこと、生命とは他人のために生きることでもあること、無意識的に行っていることが実は自分の中に神を取り込む行為であったこと、この４日間で様々な学びを得られることができ、とても感謝しています。今回自分の中で広がった生命に対する考え方をしっかり見つめ、社会に出てからもたくさんのつながりを大切にしていきたい、日本人特有の感性をいつまでも大切にしていたいという想いが強まりました。私達のためにこのセミナーを開催してくださった教養研究センターの皆様、とても貴重なお話をしてくださった講師の方々、美味しいお食事をつくってくださった宿の方、共に学びを共有した今回の参加者の皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「生命」を考える

社会人　防村 信行

はじめに

私、個人的な観点から申しますと、43歳の時（通称：後厄、現在64歳）に過労で、からだが衰弱しきっていた所に心臓に菌が付着し、弁膜症で大手術をしました。その事を境に「死」について興味を持ちました。いろいろな本を読み、様々な人の話を訊いたりしましたが、どれも跡形も無く消え去っていきました。そんな中で、ただひとつ印象に残っているのは手術前にもらった娘（当時5歳）の手紙でした。「パパ、今何を考えているの、つらいこと、かるいこと、どんなにつらくても、あきらめないでね。」この手紙が一番うれしく一番心の支えになりました。「生きる」ことをあきらめないで、と解釈して私は考えました。「死」を考えるのではなく、その裏返しの「生」について一生懸命考えることのほうが先決だ。「明日」はない、「今日」を一日有効に過ごすこと「一日一生」の標語をもって過ごすことにしています。そんな毎日の生活で、気をつけていることは、「健全な肉体には、健全な精神が宿る」をモットーに体を鍛え、鍛えた肉体が精神を洗い、贅肉を取り削ぎ、凛とした気品と格調高い精神を作るように心がけています。

さて、果たして、自分の生命観は変わっていくのだろうか？

この短い日にちで何が得られるのだろうか？　その経過をたどっていくことにします。

8月30日金曜日

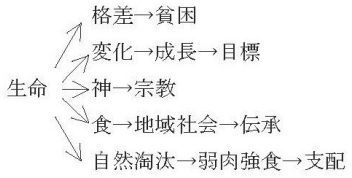
10:00自宅を出発→羽田第二ターミナル11:00→食事11:30～12:00→12:35ANA羽田発→13:35庄内空港着　機内で隣り合った人が「観光ですか？」と訊ねてきた「いえ、セミナーに参加するためです。3泊4日でして」「どちらへ？」「鶴岡というところです。」「私の地元ですよ、出羽三山の神社あって、そこは人を祭っていないところがいいですね。」「食べ物は何がおいしいですか？」「きゅうりの漬物と、赤カブはおいしいですよ、映画村はお勧めですよ。私のともだちで、たそがれ清兵衛でドザエモンの役をやったものがいて、三度も同じシーンを取り直したといっていました。」「映画も小説も読みました。昔は貧しかったのですね。」「興味深い話ありがとうございました。」といって別れた。フレンドリーなひとで、実に感じがよかった。それに引き換え、外は雨が降り続き憂鬱で不快な気分にさせられた。

14:30TTCKに集合であったので、ぎりぎり、ちょうどの到着となった。1班から6班までに分かれ、それぞれ「生命」をテーマにマインドマップを作成、私の班は5人で、もうひとりは遅れて来るとのことでした。それぞれのマップを作成したなかで一押のものを選んで、それを1枚の用紙にまとめました。私、防村以外は皆学生で、最初は違和感がありましたが、徐々に仲間意識が芽生えていきました。佐藤友弥さん（経済2年）関野泰宏さん（理工2年）浅見愛さん（文学4年）江崎隆一郎さん（経済1年）の5人のメンバーでした。

初日の8月30日金曜日

○私は次のようにマインドマップに書きました。

○グループでまとめたマインドマップを示すと



最終日の9月2日月曜日

TTCKでのマインドマップを最終のまとめとして作成し、論議をしました。それを示すと

下記のようになりました。

マインドマップで初日と最終日と、それぞれの項目を比べて、最終日に新しく加えられた項目をピックアップしてみますと

A：静→ストップ→休み

B：生→エネルギー→力→活動

C：自然→共存→人間→肉体→成長

D：日常→繰り返す→発展→創造→新しい世界

上記の4つに集約されました。この4つはどこから来て、何から発生したのだろうか？　明らかに、この3泊4日の庄内セミナーによる影響であることは確かなようだ。もう少し掘り下げた言葉で表現すると

A：下界から離れる→激しく動きのある都会の生活から離れる
B：生まれ変わる→新しい活力を生み出す
C：自然と共生して生活を送る
D：新しい世界→新しく生まれ変る→日常からの脱出

上記の新しく加わった項目は羽黒修験道によるところが多い、少し前に戻って羽黒修験道体験を追いながらその内容と意味するところを記すと

3日目　9月1日日曜日

羽黒修験体験開始（ミニ山伏体験）山岳修験の場として信仰を集める出羽三山のひとつに羽黒山があります。表参道の始まりは、羽黒山の山頂で、三神（羽黒山、月山、湯殿山）を祭った出羽三山神社の中にある巨大なかやぶき屋根の三神合 (さんじんごう) 祭殿 (さいでん) からはじまりました。三神合祭殿には、鏡池があり、池の水面によく映し出されるようですが、実際には蓮に覆われていて映ってはいませんでした。樹齢 1000 年ともいわれ、山中にある約 600 本の杉の中でもひときわ目立つ爺 (じじ) 杉 (すぎ) があります。その近くに三間五層の五重塔があります。平将門が創建したと伝えられるもので、東北最古の塔です。石段が 2446 段有り、石段の両側には、樹齢 300 年から 500 年の杉並木が続き静寂の杜は凛とした空気が満ちています。石段の足元を見ながら降りることと、躓かないように用心しながら降りていくのが精一杯で、杉並木を眺めたり、雰囲気を満喫したりする状態ではありませんでしたが、木々のかおりと澄んだ空気を思う存分に吸い込んだ感触はありました。宿舎に着くと筋肉痛と疲労で体が棒になっていました。それでも心地よい疲労感であったことは確かです。

羽黒修験道について、調べてみると：出羽三山（羽黒山、月山、湯殿山）をお参りすることによって人は生まれ変るといわれています。山伏の修行も死と再生（生まれ変り）の行であり、十界の行（断食、水絶ち、抖 (と) そう、南蛮いぶし）など、厳しいものです。修験道体験は、白装束に身をまとい、俗世界から離れ修行の一端を体験し、出羽三山の自然、そして修験道を学びます。いわば、自然と一体となって自然のエネルギーを体内に呼吸すること、自然と人間との共生を体感すること、そして、日本最古からの山伏の精神文化を実際に体験することで自分を見つめ直すことだそうです。

修験道は穏やかな山岳信仰に根をおろしながら、仏教とりわけ密教や道教など影響を受けて形付けられました。修験道は中世以降、聖なる山に分け入って谷を渡り、山々を駆け、山に籠もり、山の神霊をわが身に宿す修行を重ねた山伏たちを通じて、人々に受け入れられてきました。日本の多くの霊山が信仰を集める中で、この東北の地に起こったのが羽黒修験道です。羽黒山、月山、湯殿山は、出羽三山と総称され、1400 年余りにわたって、修験の地としてあり続けています。

羽黒修験道は、四季の峰という季節ごとの修行を行います。そのひとつ、「秋の峰」では生まれ変りの修行を実践し、生きながら若々しい生命をよみがえらせることができるという考えを確立しました。それは中世までにさかのぼる死と再生の儀礼を現在に伝える日本で唯一の修行といわれます。

修行者は自然界の生きとし生けるものと共存し生命の尊さを学び取り、互いを配慮するという考え方は、多くの人々の心に共感を呼び、さらに人の生き方を深めることができるのです。

今回のマインドマップ作成において、無意識のうちに羽黒修験道の精神が、新しくマインドマップに加わった項目に、その要素が入っていることが伺われます。

藤沢周平「春秋山伏記」

今回の目的のもうひとつには藤沢周平の世界を知ろうと思ったことがあげられます。その中のひとつの小説に、「春秋山伏記」という羽黒山の山伏を扱った、月山の裾野にある農村を描いたものがあります。若い娘きくが生きる力をなくしているのを山伏の大鷲坊が娘自身の力で蘇らせる話です。その中の一節で次のような場面があります。「『稲を見ろ』と背中に背負った娘きくに大鷲坊は話しかける。大声で『きれいだろうが。稲はなしてきれいだか、命があって、生ぎてるさげ、きれいだ。わかるがの？稲だって一生懸命生ぎたさげ、こうして稔って、きれいに光るようになった』。そして黙って聞く娘にこう続ける『おきぐ (･･) も、これがら稔らねばの。そのうち、この稲みてえに、光るようになるぞ』。娘を癒すのは、外気や若者たちの笑い声、稲田の風のそよぎ、といったものだ。五感に触れる生の喜びが娘を蘇生させる。」････この文が端的に羽黒修験道を表しているような気がする。生を失った、若者が再び生きる力を蘇らせ、再生していく（生まれかわっていく）くだりがうまく表現されていると思いました。

おわりに

山内志郎･慶應義塾大学文学部教授は「即身仏と羽黒修験」のセミナー講演の中で、「西欧の自然観とは、対極的であるという指摘が良くなされる。西欧では、人間と自然と敵対関係に立ち、自然を征服しようとしたのに対し、日本では、人間は自然と融和的な関係を持ち、調和的に生きてきた」と言うのである。上記事項から：西欧の「自然を対極に考える」と和の「自然との共生を考える」を通して、自然との関わりを意識することが、今回の習得だと感じました。今まで、考えも、意識もほとんどしていなかったが、今回のセミナーで自然とどのように付き合い、どのように関わりあっていくかが、ひとつの課題として、これからの人生の考えるヒントとしたいと思います。

庄内地方から学んだ生命観

経済学部４年　横尾 直哉

私は本セミナーの事前課題、「自分とはどんな存在であるか」において、自分とは、変化する存在であり、その変化の積み重ね、総和が自分なのだと書いた。

また、セミナー初日のマインドマップ作成においては、「生命」という言葉から、始まり、終わり、死後の世界などを連想した。

班員からは、死への抗い、欲、自分などの意見が出た。

即身仏拝観では、鉄門海上人の生き方、三千日に及ぶ苦行、飢饉や悪病に苦しむ衆生を救うために自らの身をささげるなど、その壮絶な生き方や、自らの身をささげて衆生を救うという独特の死生観、精神性に触れた。

最後に、修行体験では、滝打ちで熱を断ち、南蛮いぶしで空気を断った。どちらも非常に厳しい修業だった。

・生命観

私は、死というものを、漠然と終わりを意味し、誰にでも訪れるものであり、当然避けるべきものだと考えていた。裏を返せば、生きるということは、死に抗うことのように考えていた。十分な睡眠をとること、バランスのとれた食事をとること、運動をすること。これら普段何気なく行っていることも、生命維持の活動である。私は生きる＝死に抗うということを当然のことだと考えていた。

修行体験で滝打ちを行い、熱を断った時、逆に体が少し暖かくなってくることを感じた。また、いぶしの修行が終わった後には、必死に新鮮な空気を求めた。このような時に、自分の中の生命力、生きようとする力のようなものを感じた。

だから、即身仏になった方たちのように、五穀十穀を断ち、山草・木の実だけを食べる木食行を行い、肉体の脂肪・水分を極限まで落とし、自ら死に向かうということは、衝撃的なことであった。今までに考えたことのない生き方だった。
苦行を通して自らの罪や穢れを除くとともに、自らの身をささげることで飢饉や悪病に苦しむ衆生を救うこと、死ぬことによって何か事を成し遂げるということは、今までに考えたことのない概念だった。

何か事をなすなら生きているうちだし、死というのは当然避けるべきことだと考えていた。

しかし、即身仏を拝観し、鉄門海上人の生き方、自らに苦行を課して死に向かう生き方を知ることで、生きるということは、死に抗うことだけでなく、自ら死に向かうこともあるのだということに気づかされた。自ら死に向かうことも一つの生き方、生きることだとするならば、生きるとは、どこまでも主体的な活動の事を指すのだと考えるようになった。

また、班内での対話と議論では、個人の「終わり」はどこにあるのかということについて話し合った。自分の死後、自分の体が朽ちて養分となり、それが植物を育て、動物のえさとなり、それが人間の食物になる。個人が死んだとしても、それが何らかの形で活かされている場合、それは本当にその個人の終わりなのかという議論であった。

私は、たとえ個人の死や、死後の肉体が何らかの形で活かされることがあっても、一度死んだら、その個人は終わりを迎えたと考える。

たとえ、死後何らかの形でその肉体、個人が活かされたとしても、その個人に意識や意思がないのであれば、それは生命としての一つの区切り、「終わり」としてとらえていいのではないかと考えるからである。

なぜなら、生きるとは主体的な活動であると考えたからである。私は、当初生きるとは死に抗うことだと考えていたが、即身仏になった方のように、自ら死に向かう生き方もあることを知った。そこから、自ら死に向かうことも一つの生き方、生きることだとするならば、生きるとは、どこまでも主体的な活動の事を指すのだと考えるようになった。

しかし、一度死を迎えれば、そこには意識も意思もなく、主体性をもつこともなくなる。だから、たとえ個人の死や、死後の肉体が何らかの形で活かされることがあっても、一度死んだら、それはその個人の終わりだと考える。

生きるとは、死に抗うことだけでなく、死に向かうこともあるということ。個人の終わりとは、その個人の生命の終わりだと考えたことから、生命とは、限りのあるものであり、生きるとは、死に抗う、自ら死に向うに関わらず、どこまでも主体的な活動だと考えるにいたった。

2013 年度「庄内セミナー」報告書

資料編

1．参加者構成

No.	所属	学年	氏名
1	経済学部	2	青木佳祐
2	社会人：慶應大学嘱託職員		赤羽裕子
3	文学部	4	浅見　愛
4	文学部	3	池田絢音
5	社会人：会社役員		入江 一光
6	法学部政治学科	2	梅井茉実香
7	経済学部	1	江崎隆一郎
8	商学部	2	王　　沁
9	理工学部	2	大西基也
10	経済学部	3	大宅宏季
11	経済学部	2	荻野真平
12	社会人：会社員		長田俊彦
13	理工学部	2	小田武春
14	社会人：会社役員		栗田優一
15	経済学部	2	児玉隼平
16	法学部法律学科	1	佐藤　敦
17	経済学部	2	佐藤友弥
18	経済研究科	2	塩澤　翔
19	商学部	2	鈴木護修
20	理工学部	2	関野泰宏
21	経営管理研究科	2	陳　廷羽
22	社会人：会社員		中谷任良
23	文学部	4	中坪千賀子
24	文学部	4	濱口菜津子
25	文学部	3	三木瑶子
26	経済学部	4	宮杉隼人
27	文学部	2	茂田雄哉
28	経済学部	2	守谷祐樹
29	社会人：看護師		山崎秀明
30	商学部	1	山崎梨子
31	文学部	4	山本恵美
32	社会人：慶應大学嘱託職員		防村信行
33	経済学部	4	横尾直哉
34	慶應通信学生		渡辺　保
35	スタッフ： 慶應義塾大学経済学部教授		羽田　功
36	スタッフ： 慶應義塾大学経済学部教授		不破有理
37	スタッフ： 慶應義塾大学経済学部教授		塩澤修平
38	スタッフ： 慶應義塾大学商学部准教授		高橋幸吉
39	スタッフ： 慶應義塾大学理工学部専任講師		井本由紀
40	スタッフ： 慶應義塾大学出版会		小磯勝人
41	スタッフ： 慶應義塾大学教養研究センター		武内孝治
42	スタッフ： 慶應義塾大学教養研究センター		日水邦昭
43	スタッフ： 慶應義塾大学教養研究センター		提橋季実子

2. 第４回庄内セミナー　アンケート結果

・実施日：2013 年 9 月 2 日（月）（セミナー最終日）
・回答数：33（ただし、項目によって複数選択・複数回答・未回答あり）

〈項目別結果〉

１．今回のセミナーについてはどのように知りましたか？
ポスター：13
Web サイト：2
チラシ：5
教員から：9
友人から：2
その他：2（文明塾、塾生の娘さん）

２．今回のセミナーについて、以下の項目に沿ってご意見をお聞かせください。

１）テーマについて「庄内に学ぶ生命―あらためて生と死を考える―」
難しかった：8
適当だった：25
やさしすぎた：0

【主な意見（自由記入）】
・体で感じることはたびたびあったが、それを言葉にしたり、頭で考えたり、アウトプットすることは、とても難しいと思った。（理工学部）
・参加する前は、抽象的なテーマで戸惑いました。（文学部）
・自分が考える生命観が今まで全くまとまっていなかった事に気付かされました。（経済学部）
・テーマで敬遠する人もいそうですが、あまり考えないテーマなのでよかったと思います。（文学部）
・難しいことを考えようというセミナーなので、そういう意味では適当。（経済学研究科）
・即身仏の見学から山伏体験を経て、生と死について考えることができたと思います。（通信学部）
・自然・歴史・宗教・科学の多方面から生命を学ぶ機会だった。（社会人）
・自然と、そこにある信仰を肌で感じることができる良いプログラムだったと思います。（社会人）

２）時期について（8 月 30 日～ 9 月 2 日）
適当：33
他の時期にすべき：0

【主な意見（自由記入）】
・学生は夏休みなので特に問題ない。（理工学部）
・山がとてもきれいだった。（理工学部）
・できるなら 9 月上旬あたりに開催してほしかった。（サークルの合宿とかぶりやすいから）（法学部）
・山伏修行の時期と重なっていたので適当だと思います。（通信学部）
・八朔祭と山伏修行は、この時期しかないのでこの時期に行うべき。（社会人）

３）スケジュールについて
もう少し余裕がほしい：8
適当：22
もう少し内容を盛り込んでも良い：2
（無回答：1）

【主な意見（自由記入）】
・フィールドワーク後の夜のセッションはキツかったです…。（社会人）
・修験の後の座学は疲れて眠かったです。（理工学部）
・ちょうどいいと思います。（通信学部）
・週末をはさんでいたので、社会人の方も参加しやすかったと思います。（文学部）
・松ヶ岡開墾場をもっと見学したかったです。（文学部）
・初日の 14:30 集合が厳しかったです。夜行バスで来たので早く着きすぎて困りました。（文学部）
・自由行動を増やしてほしいです。（商学部）

４）講演について

■ 8 月 30 日「福澤と徂徠学」（講師：小室正紀氏）
とても良かった：19
良かった：13
普通：0
良くなかった：1

【主な意見（自由記入）】
・徂徠学については本を読んだが言葉が難しく、理解しにくかったけど、先生のお話でよくわかりました。（社会人）
・徂徠学をもっと知りたくなりました。（商学部）
・徂徠学とは、その考え方とは、というところがとても分かりやすく、ロジックがしっかりしていたのでスムーズに理解できた。（理工学部）
・封建的で行き詰っている印象がある朱子学の中で、徂徠学の新鮮さがうかがえました。今度、徂徠学についてくわしく学ぼうと思います。（文学部）
・論語について学んだことはありますが、徂徠学のような視点を持って読むとまた面白いことに気付かせてくれました。（社会人）
・徂徠学の現代的な思考と似ていることを知れた。面白かったです。（経済学部）
・非常に親しみやすい口調でした。（経済学部）
・江戸時代にあれだけの政治学が成立していたことに驚き。（経済学研究科）
・高校の日本史で学んだというバックグラウンドがあったので、興味を持って聞けましたし、とても話が面白かったです。（文学部）

■ 8 月 31 日「即身仏と羽黒修験」（講師：山内志朗氏）
とても良かった：12
良かった：17
普通：3

あまり良くなかった：1

【主な意見（自由記入）】

・山内先生が喜々としてミイラについて語るご様子が何よりたのしかったです。（社会人）
・即身仏の奥の深さが分かりました。（商学部）
・とても分かりやすく、楽しく解説してくださって、大変勉強になりました。（社会人）
・資料がすごく面白かったです。（経済学部）
・ほぼ全く知らない概念であったものを、日本の宗教観も絡めてお話くださり、とても興味深かったです。（文学部）
・即身仏を拝見して、生と死について、庄内の宗教について、考えることができて良かったです。（通信学部）
・ミイラのお話など交え、ただ神聖なものとして捉えてしまいがちな即身仏について、歴史や科学的根拠にもとづいて、お話いただいたことが面白かったです。（文学部）
・日本ミイラ研究グループなるものの存在を知ることができてためになりました。（文学部）

■9月1日「庄内文化論」（講師：酒井忠久氏）

とても良かった：9
良かった：4
普通：16
あまり良くなかった：3
無回答：1

【主な意見（自由記入）】

・庄内文化について、教えていただいてよかったです。（通信学部）
・自分が知っている情報よりさらに増えました。庄内人の気分と藩主との関りについて聞いてみたかったです。（社会人）
・庄内の土地柄・住民性が江戸期から明治期にかける政治にどう影響したのか、興味深い内容でした。（文学部）
・少し難しかったので、また自分で勉強してみたい。（理工学部）
・質問に積極的にお答え頂き、有難かった。旧藩主と現代の関りが興味深かった。（社会人）
・お殿様の今の心境が聴けて良かったです。（商学部）

■9月1日「庄内文化論」（講師：春山進氏）

とても良かった：14
良かった：13
普通：4
あまり良くなかった：0
無回答：2

【主な意見（自由記入）】

・おもしろさが凄く伝わってきた。色々な情報がつまっていながら、とてもスムーズに入ってきた。（理工学部）
・庄内に息づく信仰について、興味深く聞かせて頂きました。（社会人）
・おくりびとが何故庄内を舞台にしたかが理解できました。（社会人）
・祖霊信仰のお話など、興味深かったです。（経済学部）
・山内先生のお話とは違う視点で「日本人」「庄内の人」をお話なさって、民族的な部分をより深く知ることができ、大変興味深かったです。（文学部）
・事前に配布して下さった鶴岡の地図が文化的な枠組みを捉えるのに、とても役立ちました。モリ供養や祖霊信仰のお話は、4日間すべての行程の基礎になる要素が沢山あって、理解のヒントとなりました。（文学部）
・越の国出身なので、古四王社の話がとても面白かったです。（文学部）

5）羽黒山「八朔祭」について

とても良かった：18
良かった：10
普通：3
あまり良くなかった：1
無回答：1

【主な意見（自由記入）】

・こういった伝統が続いているのは素晴らしい。（経済学部）
・こんなに神秘的な祭りがあるとは知りませんでした。（通信学部）
・天候に恵まれなかったのが少し残念でした。（理工学部）
・すべてが新鮮で、新しい価値観にふれることができて良かったです。（文学部）
・非日常的な世界にひたることが出来ました。（文学部）
・ああいうかたちで伝承がなされてるのかと知った。（経済学部）
・時間が許す限り見たかったです。非常に面白かったです。（社会人）
・各地から集まった人々が炎を囲み、祭りを実行する姿は印象的でした。（文学部）
・1400年近く続く伝統の祭を見て、昔の日本に想いをはせるきっかけになった。（理工学部）
・地域信仰に基づいた祭を見ることができ、東京とはまた違った文化なので新鮮でした。（理工学部）
・貴重な体験でした。（社会人）

6）修験体験について

とても良かった：19
良かった：10
普通：3
あまり良くなかった：0
無回答：1

【主な意見（自由記入）】

・何故だか気が楽になりました。（社会人）
・とてもツラかったですが、良い勉強になりました。（商学部）
・滝打ちなどの普段出来ないことを体験できて良かった。（理工学部）
・自然を直に感じることができた。修験者の心情を少し知ることが出来たと思う。（理工学部）
・滝打ちにより、実際に水と一体になる感覚を味わえまし

た。（文学部）
・もう少しキツいコースでもよかった。（経済学部）
・何もかも初めての体験。普通の有難さを痛感できました。（社会人）
・感覚が鋭くなったと思う。（経済学部）
・自分の感覚や、修験する人の立場に少し身をおくことで、”生きること”、"死ぬこと”の見方が変わりました。（文学部）
・滝行は意外と気持ちよかった。南蛮いぶしはきつかった。（経済学部）

7）グループワーク、グループ分けについて（人数など）

【主な意見（自由記入）】
・6 人だったのでちょうどいい人数であった（理工学部）
・社会人や学生、性別がバラバラで色々な意見が聞けてよかったです。（文学部）
・グループでの行動がもっとあっても良かったと思う。（経済学研究科）
・1 人 1 人が発言しやすいワーク内容で、本心を話し合う事が出来たと思います。（経済学部）
・もっと議論をする時間をとっても良かったと思います。（社会人）
・さまざまな背景をもつ人々と交流ができ、視野が広がった。（法学部）
・若者の意見は新鮮で有難い。（社会人）
・全体に発表するときには、もう少しまとめ方などの指針を教えてもらったほうが、よいまとめになったのではないかと思いました。（法学部）
・セミナー途中で意見交換する場があっても良いかもしれないと感じた。（社会人）

3．宿泊施設について
よかった：29
普通：4
良くなかった：0

【主な意見（自由記入）】
・快適でした。（商学部）
・もっと大人数の部屋がよかったです。2 人部屋・ベッドルームより和室で大人数のほうが楽しそうです。（文学部）
・ご飯がおいしく、きれいな施設だったので、居心地がとても良かったです。（文学部）
・非常によかったです。また泊まりたいです。（社会人）
・郷土料理が食べられたり、施設が予想以上に良かったので満足。（理工学部）

4．現地までの交通手段をお知らせください。
JR：15
バス（夜行）：12
空路：5
自家用車：2
その他：1
（重複あり）

5．交通費について
・参加者の平均交通費：19,300 円

6．参加費用（参加費＋平均交通費：【学生】【社会人】）について
安い：15
適当：15
高い：3

7．本セミナーでこれから取り上げてほしいテーマがあったらお書きください。
生き方 / 庄内の若者・農家について / 野性の植物・動物 / 庄内の芸能（黒川能・黒森歌舞伎）/
庄内文化 / 食文化 / 宗教の成立する理由 / 伊勢 / 地域とビジネス / 宗教について /
庄内と狩猟集団マタギの文化交流について / 東洋と西洋（庄内から見えてくる日本の思想・風土）/ 庄内地方から現代社会への問いかけは何が可能か？ / 最新の生命科学技術の意義と、
それとは反対をいくような信仰－宗教－歴史の相互性や意義について / spyber について
体験（そば打ち / 地方での暮らしを学ぶ / 農業体験）/ 鶴岡キャンパス講師の授業 /

8．その他、庄内セミナーに関して自由に意見を述べてください。
・参加者は皆、しっかりと自分の意見を持っていて、それを共有しようという姿勢がある人たちばかりで、とても勉強になりました。真面目な話がたくさん出来て楽しかったです。（法学部）
・先端科学技術研究所の見学が出来たことがよかった。（経済学部）
・自己を肯定するってできているようでできていないし、忘れがちですが、セミナーを通してより自信が持てました。（社会人）
・推薦図書の中に案内されていたであろうが（運悪く）良い入門書を見つけることができなかった。時間をみて、きちんと勉強しておけば、さらに充実できたかと反省している。（社会人）
・体力的に厳しいこともありましたが、素晴らしい経験をさせて頂きました。有難うございます。（社会人）
・最高でした！（理工学部）
・山伏体験の他に先端生命科学研究所を見学することが出来たのが良かった。日吉や矢上とはまた違った環境で学ぶことができるのは良いと思った。（理工学部）
・とても楽しい時間でした。ありがとうございました！（社会人）
・学生と一緒に過ごし大変楽しかったです。同部屋の学生も、自分をたててくれたりと自然に対応していただき嬉しく思いました。（社会人）
・とても貴重な勉強の機会になりました。庄内地方に積み重なった文化、最後には最先端の生命研究所を見ることができて、とてもおもしろかったです。（経済学部）

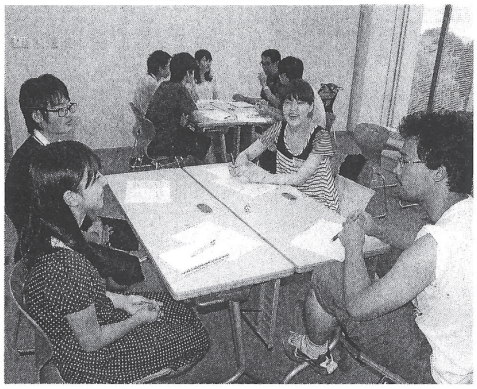
・非常に楽しいセミナーでした。一般的には経験できないプログラムがたくさんあり、非日常的なイベントが楽しかったです。（文学部）
・セッションが生命がメインテーマというより、歴史や文化的なことで質問が多く進む印象があった。多様な背景の方と関われて世界が広がった。（社会人）
・なかなか出来ない体験だと思うので、是非今後も続けて欲しい。（理工学部）
・山伏体験がよかったです。庄内の風土・歴史を感じることができました。（通信学部）
・八朔祭の概要をもう少し知りたかった。（経済学部）
・去年も参加させてもらって、改めてじっくり自分の生命について考える時間をもてたことは本当に良かった。昨年も感じてたことだが、参加者の共通バックグランドとして色々なものを聞き入れ、フィードバックできる環境はすごく貴重だと思います。（経済学部）
・日数に反して庄内の文化・伝統を底から理解できたと思います。内容の深い３日間でした。（経済学部）
・スケジュールや宿、活動がとても良かった。テーマがやや難しいけど、活動によって実感できてわかりやすかった。（商学部）
・八朔祭をもう少し見たかったので、また庄内に来ると思います。つや姫がおいしくて感動しました。（文学部）
・３日間でしたが、本当に充実しており、様々な経験ができたことに感謝しております。（文学部）
・去年から参加したくて、参加が決まった時は本当に嬉しかったです。予想以上の施設、美味しいごはんを頂け、毎日新鮮な学びを頂けて、とても充実した４日間でした。（文学部）
・庄内出身の方のお話をうかがうことが出来たことが、とてもこのセミナーを充実させていたと思いました。（参加者の方、酒井先生、春山先生…）自然を、ただ神聖視して崇拝することがしたくなかったので、自ら実践の中で感覚を捉えられたのが良かったです。また行きたいです。（文学部）
・日常生活では体験できなかったことばかりで新鮮でとても面白かったです。「セッション」やら「フィールドワーク」という言い方をすると最初は難しそうだなと思っていましたが、実際には興味深い体験をした上でそれに関する講義だったので飽きずに話を聞けました。1,000 円でこんな体験ができるのは本当に有意義だと思いました。（文学部）

3. 広報資料（ポスターならびに広報紙）

2013年9月1日	荘内日報	6面

「生命」学ぶ庄内セミナー

慶應大学生・OB38人が山伏修行など体験へ



慶應義塾大の学生らが庄内地方で合宿形式で教養力を養う「庄内セミナー」が30日、鶴岡市馬場町の鶴岡タウンキャンパスで始まった。9月2日まで3泊4日にわたり、山伏修行や即身仏との対面などを通じ、「生命」について五感で学ぶ。

主催は同大教養研究センター（所長・不破有理経済学部教授）。2008年度に開いた鶴岡セミナーを前身に、09、10、12年度に続き今回が4回目。同大の学部・大学院の学生30人とOBら社会人8人の計38人が「庄内に学ぶ生命―あらためて生と死を考える」をテーマに多角的に学ぶ。

初日の30日午後は鶴岡タウンキャンパスで開会行事。不破教授があいさつで「庄内の豊かな自然風土の中で、自分を変えることを怖がらず、心を真っさらにしていろんな色に染まってみて」とアドバイスした。

その後、セミナーリーダーの羽田功経済学部教授の指導で、最初の課題であるマインドマップ作りに挑戦。中央に「生命」と書かれた白い紙に、各自が連想する言葉を次々に網の目状に書き込み、周囲に説明しながら考えを深めるもの。「人間が自然を支配していると考えるのは間違い。全ての命は基本的に平等」「生命を突き詰めると自分に突き当たり、自分を突き詰めると欲に突き当たる」など活発に話し合っていた。

文学部3年の三木瑠子さん(20)は「日本史で即身仏のことを知り、少し興味があった。生命を見つめ直す貴重な体験になると思う」、大学院経済学研究科修士課程2年の塩澤翔さん(23)は「山伏修行など普通は体験できないことに興味を感じ参加した。体験で自分が何か変わるかも興味がある」と話した。

31日は大網の注連寺で即身仏拝観、松ケ岡開墾場、庄内藩校致道館での論語素読、夜は羽黒山頂での八朔祭の見学、1日はいでは文化記念館などでの山伏修行体験、2日は慶應大先端生命科学研究所の見学などを予定。途中、同大教授陣や地元の専門家らによる鼎談や講話も行われる。

マインドマップ作りで活発に意見を交わす受講生たち＝30日午後、鶴岡タウンキャンパス

2013年9月2日	山形新聞	17面

心静めて 冷たさ忘れ

慶応大「庄内セミナー」 学生が山伏修行体験

慶応大の「庄内セミナー」に参加する学生らが1日、鶴岡市内などで山伏修業を体験した。

セミナーは教養プログラムとして2008年から開催。首都圏の学内ではできない、自然エネルギーの体感を通しながら、命や自分自身について考えることを目的としている。ことしは同大の文学、経済学、商学など各学部の学生ら男女約40人が参加し、8月30日～9月2日まで山伏体験のほか、即身仏の拝観や慶応大先端生命科学研究所の見学、酒井忠久致道博物館館長の講義などが行われる。

1日は鶴岡市のいでは文化記念館で山伏について学んだ後、学生や教授らが白装束姿で庄内町の立谷沢川に移動。沢に入って水を浴びるとその冷たさに声を上げたが、次第に心を静めて、じっと滝に打たれた。

経済学部4年横尾直哉さん(23)は「強い水の勢いを感じたが、水流と一体となるアドバイスを思い出して取り組んだ。良い体験ができた」と話していた。

セミナーで滝行に挑戦する慶応大の学生ら＝庄内町

2013年9月3日 | 荘内日報 | 7面

擬死再生の行体験

慶応大学生ら 庄内セミナー

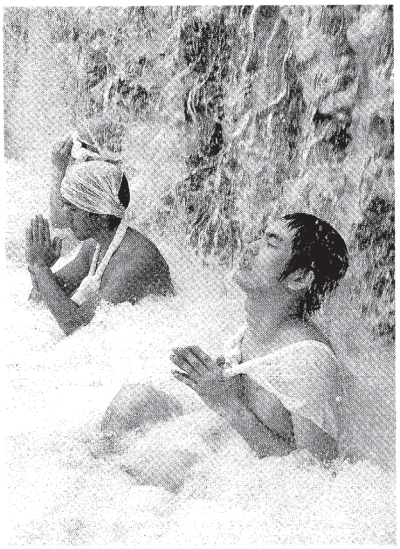
「滝打ち」に挑む

慶應義塾大教養研究センター（所長・不破有理経済学部教授）が「生命」をテーマに庄内地方で繰り広げた「庄内セミナー」は1日、鶴岡市のいでは文化記念館を拠点に山伏修行を行い、同大の学生らが滝打ちなどを通じて擬死再生の行を体験した。

庄内の自然、文化、歴史を体感し幅広い学びにつなげようと開き、今年で4回目。学部・大学院の学生30人と卒業生ら社会人8人の計38人が参加。「庄内に学ぶ生命―あらためて生と死を考える」をテーマに、8月30日―9月2日の3泊4日の日程で、注連寺（大網）での即身仏拝観、旧藩校致道館での論語素読など多角的に学んだ。

受講生たちは1日、いでは文化記念館で白い袴に宝冠など山伏姿になった。山伏修行体験塾の渡辺吉兆さんから山伏の歴史や「山伏の返事は『うけたもう』（分かりました）だけ。その精神で全てを受け入れて」など心構えを聞いた。引き続き庄内町立谷沢に移動し、山駆け、滝打ちに挑戦。玉川での滝打ちでは、雨で増水した川水が白い激流となって降り注ぐ中、学生らは体を震わせながら、必死の形相で手を合わせていた。

文学部3年の池田絢音さん(21)は「滝から出た後、地面が温かく、風の音がはっきり聞こえ、感覚がクリアになった感じ。即身仏は、衆生を救うためにそこまでやるのかと強く印象に残ったが、それを考えれば滝打ちも特別なことではないのかも」、昨年に続き2回目の参加という経済学部2年の児玉隼亜さん(19)は「滝打ちはつらいが、全てを忘れて無になれる感じ。庄内には、体と自然が一体になれる空気感があり、好きになった」とそれぞれ感想を話した。その後はいでは文化記念館で、トウガラシをいぶした煙の中に居続ける「南蛮いぶし」、再生になぞらえ火を飛び越える「出生（しゅっしょう）」などを体験。最終日の2日は慶應大先端生命科学研究所を見学した。後日、「生命」に関するレポートをまとめ考えを深める。



滝打ちの行を行う慶應大の学生ら＝1日、庄内町立谷沢

謝　辞　―あとがきに代えて―

庄内セミナー・プロジェクトリーダー
羽田　功（経済学部教授）

第４回庄内セミナー開催にあたっては多くの方々のご理解・ご協力を賜りました。とりわけ、鶴岡市のご理解とご協力がなければ庄内セミナーの開催は考えられません。あらためて心よりお礼を申し上げたいと思います。

鶴岡での合宿セミナーでは、セッションの講師を務めていただいた小室正紀先生、山内志朗先生、酒井忠久先生、春山進先生、山伏体験のご指導をいただいた渡邉雅之氏（山伏名･吉兆）、２日目に松ヶ岡本陣で美味しい昼食をご用意くださった酒井忠順氏（松岡物産株式会社社長）、軽妙洒脱なお話をしてくださった注連寺住職の佐藤弘明氏、荘内論語の素読をご指導くださった富樫恒文氏（庄内藩校致道館統括文化財保護指導員）、セミナーを通じてプログラムの多くに付き添ってくださった五十嵐展氏をはじとめとする鶴岡市役所の関係者の皆さま、宿泊・食事・講演セッションの快適な環境作りにご尽力いただいた休暇村･羽黒のスタッフの皆さま、いつもながら取材･記事掲載を通してセミナーを広く報じてくださった荘内日報社と山形新聞社にも感謝申し上げます。

さらに慶應義塾・日吉キャンパスでのセミナー関連企画にご協力くださった山形県庄内観光コンベンション協会、庄内コーポレーション株式会社・庄内観光物産館ふるさと本舗、大学生協（日吉）、日吉メディアセンター・日吉図書館の関係者の皆様にもお礼を申し上げます。

最後になりますが、またいささか手前味噌ではありますが、今回のセミナーがさまざまな成果と共に無事に終了できた何よりの功績は、セミナーの多様な課題に真摯に取り組んでくれた 34 名の参加者の姿勢にあると思います。ただ参加するだのではなく、自分たちの手でセミナーを作り上げてほしい、とのセミナー・スタッフの要望に皆がみごとに応えてくれたと思います。

セミナー・スタッフも、庄内セミナーが新たな体験・体感型の「学び」の場としてより大きな力を発揮できるよう、今後ともできるだけの努力を払っていくつもりおりますので、これまで以上のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げまして、皆さまへの謝辞にかえさせていただきます。ありがとうございました。

庄内セミナー協力団体・個人

【団体】（順不同）

鶴岡市
鶴岡市教育委員会
庄内観光コンベンション協会
いでは文化記念館
注連寺
荘内日報
山形新聞
松岡物産株式会社
休暇村　羽黒
慶應義塾大学生活共同組合
慶應義塾大学出版会
慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス
慶應義塾大学日吉メディアセンター

【個人】（順不同、敬称略）

小室正紀（慶應義塾大学経済学部教授）
山内志朗（慶應義塾大学文学部教授）
酒井忠久（財団法人致道博物館　館長）
春山　進（庄内民俗学会幹事）
富樫恒文（庄内藩校致道館統括文化財保護指導員）
渡邉雅之（いでは文化記念館　主事）
五十嵐展（鶴岡市企画部政策推進課　主事）
長田俊彦（社会人・セミナー参加者）

慶應義塾大学教養研究センター
2013年度「庄内セミナー」報告書

2013年12月3日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　不破有理

〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1
TEL　045-563-1111（代表）
Email　lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

©2013 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。